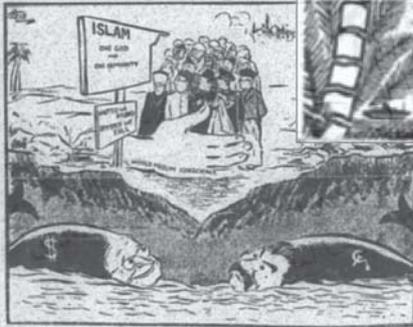


『カラム』の時代 VI

近代マレー・ムスリムの日常生活2

坪井 祐司・山本 博之 編著



CIAS Discussion Paper No. 53

『カラム』の時代VI
近代マレー・ムスリムの日常生活2

坪井 祐司・山本 博之 編著



京都大学地域研究統合情報センター

CIAS Discussion Paper No. 40

TSUBOI Yuji and YAMAMOTO Hiroyuki (eds.)

The Age of *Qalam V* — Everyday Life of Modern Malay Muslims

© Center for Integrated Area Studies, Kyoto University
46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto-shi,
Kyoto, 606-8501, Japan

TEL: +81-75-753-9603

FAX: +81-75-753-9602

E-mail: ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp>

March, 2014

目次

序『カラム』の時代Ⅴ

近代マレー・ムスリムの日常生活

坪井 祐司 4

カラムが切り取った世界

写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観

坪井 祐司 9

1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化

光成 歩 19

マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育

金子 奈央 24

『カラム』と独立準備期マラヤにおける宗教的世界観とナショナリズム

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン(翻訳 鈴木 真弓) 29

東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト

2013年度の活動紹介

山本 博之 35

序『カラム』の時代VI

近代マレー・ムスリムの日常生活2

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム (Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをまとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の6編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去5編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス (Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウイ (アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法) によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化とともにアラビア文字を使用したジャウイが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植

民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウイはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領 (現インドネシア) 地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領 (マラヤ、シンガポール) でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウイからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウイ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ (マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究

1) 『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ (Ahmad Lutfi) などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシムでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社 (Qalam Press) を立ち上げた。彼の伝記として [Talib 2002] がある。

3) 現在学術用語としてはイスラムと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっている。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった [山本2002a: 263]。

関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集めたうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）の共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像（研究代表者：坪井祐司）」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で6年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国

立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。そして、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該誌面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースはローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト（雑誌データベース班）による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア（Klasika Media）社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにするための「カラム雑誌記事データベース」の構築も進行中である⁷⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を

6) 京大地域研の『カラム』のデータベースについては、同研究所のホームページを参照 (http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)。

7) データベースは現在構築中であるが、その一部は公開されている (<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)。

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照 (<http://ylabo222.wix.com/jawi#>)。

立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁸⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である⁹⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2) ジャウィ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウィ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウィを学ぶ機会を提供することと、ジャウィに関心を持つ研究者のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2011～13年は日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催した。講習会用にジャウィを学ぶための教科書の編纂も行っている[坪井・山本編2013b]。2014年度は、2015年1月30日に京都大学にてクラシカ・メディアのノルズィアティ・モハメドロスマン(Norziati Mohd Rosman)氏を迎え、その一部で日本とマレーシアのジャウィの教授法に関する意見交換を含めた講習会を行った。講習会では、インターネットを利用した外国人等の固有名詞のジャ

ウィ綴りの特定の方法など、現在のマレーシアにおけるジャウィの教授法の一部が披露された。

(3) 『カラム』共同研究

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を利用した研究を行っている。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが6編目となる。その内容については次節で紹介することとしたい。

さらに、同プロジェクトが現在力を注いでいるのは国際的提携の分野である。プロジェクトでは『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアにおける共同事業や成果の発信に努めている。

2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の複製版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業はマレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書館(Dewan Bahasa dan Pustaka)との提携のもとで行われることとなり、2014年11月には、京大地域研の原正一郎センター長の参加を得て国際会議が行われた。また、2015年1月30日には京大地域研にて公開セミナー『『カラムの時代』と現代を結ぶ——マレー・イスラム定期刊行物の翻字複製・電子アーカイブ化』を開催した。

研究成果の国際的発信も行っている。2014年8月にマレーシア・クアラトレンガヌで行われた第9回マレーシア国際会議(The 9th International Malaysian Studies Conference)にセッション企画を組む形で参加した。セッションでは、モハメドシュクリ(Mohamed Syukri Rosli, クラシカ・メディア)がマレーシア側の事業を紹介し、光成歩、金子奈央と坪井がデータベースを利用した研究について報告した。出席したマレーシア人研究者を含めて『カラム』の現在の意義についての活発な議論が交わされた。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

8) 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編 2010: 6]を参照。

9) 詳細については、プロジェクトのホームページを参照(<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>)。

3. 本論集の構成

本論集は、『カラム』データベースの分析1編と同誌の内容に関する分析4編からなっている。後者は、イラスト、写真、広告、連載コラムといった『カラム』の諸要素をとりあげ、その世界観を描き出そうとするものである。以下、内容を簡単に紹介したい。

亀田堯宙「カラムデータベースにおける理解支援——展望と周辺技術」

亀田は、情報学の立場から『カラム』の理解を深めるための二つの方法論を展望している。第一には、カラムの文章内に現れる専門用語や引用記述などについて、対応する外部データベースのデータを見つける技術(Entity Linking)である。同誌に登場するクルアーンなどの書籍や他の定期刊行物の記事からの引用について、引用元に関連するデータベースと関連付ける可能性が指摘される。第二は、「何が」語られているか、それが「どう」語られているか、というレトリックを情報学的に分析する技術である。そこでは、文の間の関係性や単語の分布などに着目して文章の構造を解析する手法が示されている。

山本博之「イスラム雑誌『カラム』の風刺画」

山本は、『カラム』に掲載された三つのイラストをとりあげ、そこにこめられたメッセージを分析した。3点のイラストは、いずれも当時のマレー・ムスリムが岐路に立っていることを示す絵が含まれていた。ローマ字(とそれに付随する欧米式の生活様式)かジャウィ(イスラム式の生活様式)か、冷戦下でアメリカにつくのかソ連につくのか(またはそれ以外の道があるのか)、そして高床式家屋(自然環境や伝統文化を守る方向)か工場(工業開発と経済発展を求める方向)かという選択肢が描かれ、その進路を問うたのである。言葉ではなく絵を使用することで、書き手と読み手がメッセージを共有したときに皮肉や批判が伝わる一方で、メッセージが共有されなければ皮肉・批判も悪意も伝わらないという風刺のあり方を見ることができる。

坪井祐司「『カラム』が切り取った世界Ⅱ——1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化」

坪井は、1953~56年に『カラム』誌が掲載した写真

およびそれに関連する記事に焦点をあて、当該時期におけるマレー・ムスリム知識人の世界観を分析する。創刊当初の50年代初頭と比べて、50年代中葉の同誌ではマラヤ、インドネシアといった東南アジアの記事・写真が増え、中東など他地域のイスラム諸国の比率は低下した。内容も、女性の写真を多く掲載した華やかさはいくぶん失われ、その分上記二国の国内政治や国際政治が中心的に描かれている。このことは、世界的な冷戦構造が強まってイスラム世界もその中に巻き込まれつつあったこと、マラヤ、インドネシアが民族主義的な国家建設に向かったことで、宗教による境界を越えた連帯を主張した『カラム』の政治的立ち位置が狭まってきたことを示している。一方で、アメリカの生活を紹介した記事には写真がふんだんに盛り込まれており、そこには同誌の近代主義的な側面がみとれる。

光成歩「大衆誌から宗教誌へ——広告にみるカラム誌の立ち位置の変遷」

光成は、創刊から1956年にかけての『カラム』掲載広告の推移の分析をとおして、『カラム』が総合誌から宗教誌へとその位置づけを変化させたと論じる。初期の広告欄に表われていた消費や芸能などの娯楽要素は、UMNOによる糾弾事件(1953年)を機に失われ、ムスリム同胞団の結成時期(1956年5月)には明確にイスラム的要素の情報発信に力点を移した。1950年代はマラヤにおいて政治的独立の枠組みが論じられ、マレー人右派政党UMNOの優位が確立していった時期である。この過程で、宗教を軸とする政治的主張は影響力をそがれていった。同じカラム出版社が発行した女優の写真や扇情的な小説を売りにした芸能誌『アネカ・ワルナ』が若者の人気を集める商業雑誌となる一方、『カラム』は消費や娯楽と関わる商業広告の掲載をやめ、より限定された読者を想定してイスラム的要素を強調するようになった。

金子奈央「読者の日常生活におけるハラル」

金子は、『カラム』誌に掲載された読者からの質問コーナーにおけるハラル(Halal)に関連する質問に着目し、マレー・ムスリムが持っていた日常的なハラルに関わる疑問や問題意識について整理する。この時代の社会やイスラムをとりまく環境の変化に伴い、物ごとや、行いにおけるハラル(許されるもの)、ハラム(禁止されるもの)の価値判断基準に対する多様な疑問マ

レー・ムスリムは抱いていた。質問が集中したのは、「お金」、「文化」、「飲食」、「イバーダート(ムスリムが守るべき義務)」の4点であった。彼らは、近代国家という新しい統治枠組みのもとで、イスラム以外の習慣や文化、ムスリム以外の人々と「交わる」ことが日常的である一方で、一人のムスリムとしてハラルを実践し続けるための知識や知恵を持つことが求められた。「ハラル」の実践を日常生活の中で理解しようとしていたことが、彼らの投稿から垣間見える。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の4編の論考から浮かび上がる『カラム』の特徴とシンガポールを中心とするマレー・ムスリムにとっての1950年代という時代性について簡単に記してみたい。

そのうち3編の論考は、いずれも前編[坪井・山本編2014]の続編といえる論考である。坪井は写真、光成は広告、金子は読者からの投書に焦点をあて、読者として想定される主に都市部のマレー・ムスリムの世界観や生活の様子を明らかにするものである。さらに、本編では山本がイラストをとりあげ、編集部と読者のメッセージのやり取りを明らかにした。そこから、当時のマレー語雑誌の持つ大衆的・双方向的性格が見取れる。

これらの分析から、多民族社会、しかもムスリムが少数派である都市部において、彼らが自らの宗教的な正しさと社会との折り合いを模索する姿をそこに見出すことができる。彼らは、当時圧倒的な力を持っていたアメリカに代表される西洋近代とその都市文化に憧憬を抱きながらも、日常生活や消費活動においては宗教的に正しくあろうとした。金子論文からは、彼らが異文化との日常的な接触の中で社会における立ち位置を定めていることがわかる。

さらに、本編の坪井、光成の論考からは、1950年中葉に『カラム』が内向きになっていくという年代的变化がうかがえる。1950年の創刊当初、『カラム』の一つの特徴はその国際性にあった。写真記事は中東のイスラム圏を中心に全世界を網羅しており、広告には国際的・近代的な消費物資があふれていた。しかし、50年代中葉になると、写真は東南アジアの政治関連のもの

が中心となり、広告も宗教色を強めた。これは、光成が指摘するように、53年のUMNOとの対立を転機として、『カラム』を取り巻く環境が厳しくなり、内容も変化せざるを得なかったことによるものであろう。くわえて、マラヤでは各民族政党の連携による独立に向けて大きく舵が切れ、インドネシアではスカルノ政権下でイスラム政党の停滞が明らかになった時期でもある。『カラム』が内向きになった背景には、イスラム勢力を取り巻く時代状況全体が変化したことも指摘できる。

このように、『カラム』は一貫してイスラム近代主義的な思想にもとづいた言論活動を行っているが、子細に時期を分けて総合的な分析することで東南アジアのイスラム世界全体の変化を浮かび上がらせることが可能である。本編では1950年代中葉までであるが、後の時期まで射程をひろげることにより、『カラム』の時代としての1950、60年代のマレー・ムスリムの社会史を描くことが可能になろう。そのためには、亀田が提示したような情報学的手法の利用を含めて、共同研究を通じてデータベース全体を様々な角度から分析することが不可欠である。そうした作業により、20年間にわたって発行された『カラム』の資料的価値が最大限に発揮されることになると考えられるのである。

参考文献

- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司、山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編(CIAS Discussion Paper No. 19)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計(CIAS Discussion Paper No. 23)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2013a 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成(CIAS Discussion Paper No. 32)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b 『ジャウイを学ぶ(CIAS Discussion Paper No. 38)』京都大学地域研究情報統合センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2014 『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS

Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター。

山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。

山本博之 2002b 「ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方:20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。

山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究情報統合センター。

カラムデータベースにおける理解支援 展望と周辺技術

亀田亮宙

はじめに

京都大学地域研究統合情報センター（以下、地域研）では、研究者の研究資源を共有すべく、Myデータベースシステムが構築されている。CSVのような表形式のデータをアップロードしデータベース構造に関する情報を設定するだけで、データの検索、APIの提供を可能にしている。カラムデータベースも、データはMyデータベースに入っており、システムが提供する元々の検索インタフェース¹⁾も備えている。一方で、データの構造や内容を知らない利用者は検索ワードを思い浮かべることができない。これを解決するために、ワードクラウド(図1)による検索や、号ごとに表紙を並べた一覧ページ用意することにより、より幅広い人に使ってもらうことができるようなサイトも、MyデータベースのAPIを利用して構築されている²⁾。また、JawiとRumi³⁾を左右に並べて閲覧できるインタフェースなども工夫されている[山本 2014]。

つまり、カラムのデータ化、ローマ字翻字、検索・閲覧のインタフェースという土台は既にできあがったと言える。次の方向性の一つは、カラム以外の雑誌の収集とデータベース化であり、雑誌の枠を越えた引用や論争の多いマレー・インドネシア語定期刊物の言論空間において、それを一体として捉えることは非常に重要である。

一方で、言論空間を一体として捉えるためには、言及先の同定や、同じトピックを扱っている記事の関連付け、議論におけるロジックやレトリックの理解が必要になってくる。本稿では、カラムについて利用者が理解を深めるためにそれらを情報技術で支援するにあたって、展望について周辺技術を含めつつ紹介す



図1 質問コーナーでよく使われる単語を検索クエリとして提示しているワードクラウド

る。大きく分けると2つの支援を想定している。1つ目は、Entity Linking と呼ばれる技術で、カラムの文章内に現れる専門用語や引用記述などについて、対応する外部データベースのデータを見つける技術である。2つ目は、レトリックの研究である。言い換えると、「何が」語られているか、それが「どう」語られているか、という2つの側面で整理することで、カラムの理解を支援したいと考えている。

Entity Linking

カラムの中には、クルアーンをはじめとして、他の書物、雑誌やニュースに対する言及が多数出現する。これは、カラムの時代を読み解くにあたって、カラムだけを見ては不十分で、周りの資料やそれら資料との関係を読み解いていくことが必要だということを意味している。そして、その読み解きの一歩として、言及それぞれの言及先を同定することは理解の助けになるだろう。

1) http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003qalam2

2) <http://majalahqalam.kyoto.jp/>

3) アラビア文字で書かれたマレー語はJawi、ローマ字で書かれたマレー語はRumiと呼ばれる

表1 カラムに出てくる引用文(左)とクラーンデータベース内のマレー語翻訳文(右)

<p>Sesungguhnya Allah tidak akan mengampunkan yang ia disekutukan, tetapi ia akan mengampuni selain daripada itu bagi sesiapa yang ia kehendaki: dan barangsiapa yang menyekutukan Allah maka sesungguhnya ia telah membuat suatu dosa yang terang dan nyata</p>	<p>Sesungguhnya Allah tidak akan mengampunkan dosa syirik mempersekutukanNya (dengan sesuatu apajua), dan akan mengampunkan dosa yang lain dari itu bagi sesiapa yang dikehendakiNya (menurut aturan SyariatNya). Dan sesiapa yang mempersekutukan Allah (dengan sesuatu yang lain), maka sesungguhnya ia telah melakukan dosa yang besar.</p>
--	--

クラーンの引用については、例えば、カラムの「Bidasan Kepada Faham Tak Bertuhan」[Qalam 1950.12:11]の記事において、「Sesungguhnya Allah tidak akan mengampunkan yang ia disekutukan …」といった章句が引用されている。これは、4章48節の文言に対応しているが、quran.com⁴⁾のようなデータベース内の章句と一字一句対応しているわけではないが(表1)、コンピュータによる対応の発見が可能だろう[ブルドン宮本 & 山本 2013]。

資料間の言及については、たとえば[光成 2012]では、カラムの「Kahwin Paksa dan Wali Mujbir(強制婚と強制後見)」[Qalam 1954.4: 29]の記事において、ジャカルタの新聞『アバディ』から記事を転載している例が示されている。こちらの場合は『アバディ』の方がデータベース化されていないため、自動で対応付けることはできない。

ここまでは文レベルでの関連付けを見てきたが、語レベルでの関連付けも有用だと考えられる。例えば *Islah* や *Kafir* といった言葉は、イスラムの専門用語で、それぞれ *reform* や *unbeliever* と英訳されることが多いものの、その訳のみでは意味を捉えきれず、理解には背景知識が必要になる。その場合は、適切な解説にリンクすることで利用者の理解を促進することが可能になる。

言及先の同定には複数の関連技術、関連研究が存在する。人名、地名など特定のタイプの用語のことを Named Entity と呼び、文書内からそういった用語を発見することを Named Entity Recognition (以下NER)、それを外部データベースと関連付けることを Named Entity Linking (以下NEL)と呼ぶ。良くつかわれる外部データベースの一つに Wikipedia⁵⁾があり、Wikipediaのデータと結びつけることは俗に Wikify とも呼ばれる。これら単語やフレーズレベルの同定技術は、引用文のような文章レベルで用いることもできる。用語や文章とその文脈を手掛かりに類似性を測り

対応するデータを探すという技術的枠組みは変わらない。

Entity Linking の手法は[Shen 2014]に最新のサーベイがある。多くの研究で、対応する候補の選定、類似性による候補のランキング、対応先が無いことの検知の3つのモジュールによってEntity Linking が行われているとまとめられている。また、対応付け先のデータベースとしてはWikipediaの他、DBpedia やYAGOといった汎用的なデータベースが代表的なものとして挙げられているが、個々の分野に特化したEntity Linkingの研究もある。例えば、絶滅危惧種の種名からデータベース内にある種の情報へリンクする研究を筆者は行っている[Kameda et al. 2013]。類似性による候補のランキングについてはレーベンシュタイン距離を測るといった表層的なマッチングから、Latent Dirichlet Allocationのように語の背後にあるトピックを推定した上でマッチングを考えるものまでさまざまであるが、引用のように文言をそのまま使いまわすことが多い場合は表層的なマッチングが有効と考えられる⁶⁾。ただし、マレー語は接頭辞や接尾辞による変化が豊富であり、それらを省くような前処理を行うか、Longest Common Subsequenceのようにそういった変化と関わりなく類似性を測れる指標を使うように留意せねばならない。また、多くの論文で実験データセットとして用いられているのは、NIST Text Analysis Conference(TAC)⁷⁾の Knowledge Base Population (KBP)タスクのデータであるが、これは英語に限られている。言語横断でのEntity Linking [McNamee et al. 2011] では、対訳対のあるコーパスの英語側のみにNamed Entity のアノ

4) The Noble Qur'an <http://quran.com/>

5) Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/> (日本語版へのリンク)

6) 引用ではないが、同じく語の使いまわしが多い、論文の概要と本文における対応発見において、表層的なマッチングが比較的機能することを「論文における要約記述に対応するパラグラフの同定手法」(亀田亮宙 et al., 2013. 人工知能学会全国大会(第27回)論文集)で発表しており、今回も表層的な手がかりを中心に対応付けを行いたいと考えている。

7) Text Analysis Conference (TAC) Overview <http://www.nist.gov/tac/about/index.html>

テーションを行って、Berkley Aligner⁸⁾を適用し対応する語を特定することで、独自にデータセットを作っている⁹⁾。英語以外の言語でのコーパスやデータセットは自然言語処理研究において不足しており、カラムデータベースを元に、このようなタスクの評価に用いることができるデータセットを作ることで、他の研究者との協働も促進したいと考えている。

レトリック

カラムの中には、1001 Masalah (千一間)と題された質問コーナーがあり、ここでは日常的な読者の疑問にイスラムの立場から回答がなされている。例えば、Q「バドミントン、ホッケー、サッカーをすることはイスラムの教えに反するか？」A「ゲームはイスラムの教えに反しない。それはレクリエーションだ。しかし、男性と女性で混ざって行った場合は教えに反する。」といった問答が見られる [Qalam 1952.1: 35] (図2)。内容に着目すると、価値観や道徳観念の変遷を辿ることができるが [金子 2014]、一方で、答え方のレトリックも興味深い。先に挙げたように端的に答えたのちに条件を付すものも多くみられる一方、国による産児制限の考えに従ってよいかという質問に対しては、「この質問に答える前に、産児制限や家族計画の目的について知

-----*-----*-----

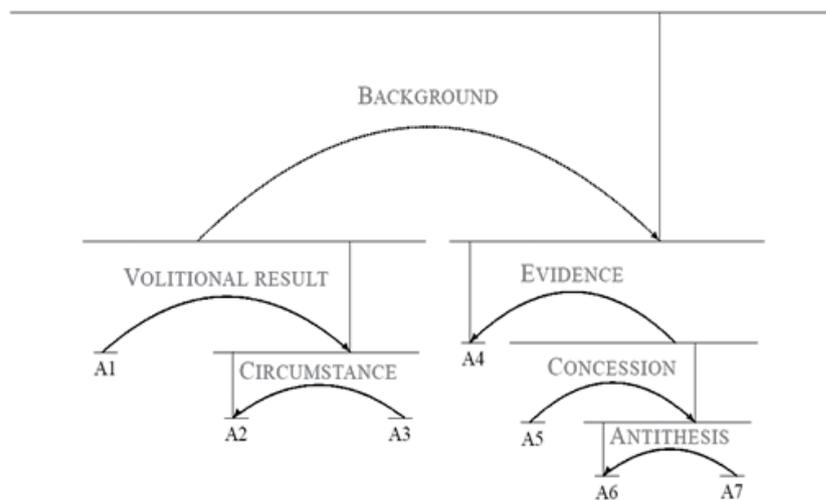
Hussin, Parit Lat, Nombor 1 Jalan Baharu, Parit

Buntar Perak bertanya: Adakah permainan badminton, hoki dan football, itu haram?

Jawab: Permainan-permainan itu tidak haram. Ia suatu riadah. Tetapi yang haram di dalamnya ialah aurat yang terbuka demikian juga pergaulan di antara lelaki dengan perempuan.

図2 1001 Masalah の問答例

8) berkeleyaligner - A word alignment software package for machine translation - Berkley Aligner <https://code.google.com/p/berkeleyaligner/>
 9) Cross-Language Entity Linking <http://pmcnamee.net/xlel.html> に公開されている。



[Farmington police had to help control traffic recently]^{A1} [when hundreds of people lined up to be among the first applying for jobs at the yet-to-open Marriott Hotel.]^{A2} [The hotel's help-wanted announcement - for 300 openings - was a rare opportunity for many unemployed.]^{A3} [The people waiting in line carried a message, a refutation, of claims that the jobless could be employed if only they showed enough moxie.]^{A4} [Every rule has exceptions.]^{A5} [but the tragic and too-common tableaux of hundreds or even thousands of people snake-lining up for any task with a paycheck illustrates a lack of jobs.]^{A6} [not laziness.]^{A7}

(The Hartford Courant, editorial)

図3 [Mann & Thompson 1988]における文の解析例

る必要がある。」と前置きして、国家政策や家計の現実的な説明を踏まえ「子供の数を抑えることが求められている」と理解を示したのち、ただ一文「イスラムの教義に従えば、子どもは神からの授かりものであり、それを人間がどうにかすることはできない。」と述べることで直接的に回答しない形がとられている [Qalam 1951.12: 41]。

レトリックの研究は古くからおこなわれており、Rhetorical Structure 理論 [Mann & Thompson 1988] は要約の生成や文章の生成および解析の手法として用いられてきた。これは文の間の関係に着目して、ツリー上に文章の構造を解析する理論である (図3¹⁰⁾)。近年ではその分析をコンピュータによって行う手法が開発されており、表層的な手がかりを使ったもの [Marcu 1997] から一階述語論理の構造を手かったもの [Subba 2007] までさまざまある。よりマクロな構造の分析としては背景説明や対照比較といったレトリックの機能を共有している文のまとまりによって科学論文の構造を分析する Argumentative Zoning 理論がある [Teufel 2010]。こちらもコンピュータによる分析の手法が洗練されてきており、例えばトピックから単語を生成するモデルとレトリックから単語

10) 図自体は分かり易く描かれていた [Forsbom 2005] のものを掲載している。

を生成するモデルを合わせることでArgumentative Zoneごとの単語の分布をモデリングする手法が提唱されている[Ó Séaghdha & Teufel 2014]。

おわりに

カラムで何がどう語られているかの理解を支援するための技術について調査し展望を述べた。今後は具体的な事例を作って、有効性を検証しながら理解支援の技術を実装していきたいと考えている。

参考文献

- Forsbom, E., 2005. Rhetorical Structure Theory in Natural Language Generation.
- Kameda, A. et al., 2013. Integrate Japanese Red List into LOD of Species. *PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013*.
- Mann, W.C. & Thompson, S. a, 1988. Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization. *Natural Language Generation: New Results in Artificial Intelligence, Psychology and Linguistics*, 8, pp.243–281.
- Marcu, D., 1997. The rhetorical parsing of natural language texts. *Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*, pp.96–103.
- Mcnamee, P. et al., 2011. Cross-Language Entity Linking. *Proceedings of the 5th International Joint Conference on Natural Language Processing (IJCNLP-2011)*, pp.255–263.
- Ó Séaghdha, D. & Teufel, S., 2014. Unsupervised learning of rhetorical structure with un-topic models. *Proceedings of COLING 2014, the 25th International Conference on Computational Linguistics: Technical Papers*, pp.2–13.
- Shen, W., 2014. Entity Linking with a Knowledge Base: Issues Techniques, and Solutions. *Knowledge and Data Engineering, IEEE Transactions*, 27(2), pp.1–20.
- Subba, R., 2007. Exploiting Event Semantics to Parse the Rhetorical Structure of Natural Language Text. *Proceedings of the NAACL-HLT 2007 Doctoral Consortium*, pp.21–24.
- Teufel, S., 2010. *The Structure of Scientific Articles: Application to Citation Indexing and Summarization*, Stanford, CA: CSLI Publications.
- ブルドン宮本ジュリアン & 山本博之 2013「アラビア文字・多言語文書の横断検索システム構築——『カラム』記事のコーラン引用部分表示の試み」『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』 pp. 9–20.
- 金子奈央, 2014. 「マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育」『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活(CIAS Discussion Paper No. 40)』 pp. 24–28.
- 光成歩 2012 「1950年代の『強制婚』論議にみるカラム誌の改革論理」『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計(CIAS Discussion Paper No. 23)』 pp. 40–47.
- 山本博之 2014 「東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト——2013年度の活動紹介」『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活(CIAS Discussion Paper No. 40)』 pp. 35–41.

イスラム雑誌 『カラム』の風刺画

山本博之

2015年初頭、フランスの風刺週刊新聞の編集部が武装した男らに襲われ、12人が殺害される事件が起こった。この週刊新聞はイスラム教の預言者を題材にした風刺画をたびたび掲載してイスラム教徒の反発を買っており、また、襲撃事件の直前にはイスラム教徒を過激派として挑発するような風刺画を掲載していたことなどから、この襲撃はイスラム教やイスラム教徒への揶揄に対する抗議が暴力的な手段を取ったものと理解され、表現の自由はどこまで許されるのか、また暴力的な手段により抗議することが許されるのかといった議論が起こった。

本稿では、これより約50年前のマレー・イスラム世界において、政治指導者や宗教指導者に対する厳しい批判で知られていたマレー語月刊誌『カラム』の誌面に見られるイラストをもとに、『カラム』による風刺について紹介したい。

『カラム』は20年間に229号が刊行された。記事には写真が多く使われ、また、写真・イラスト入りの広告も毎号のように掲載されていた¹⁾。ただし、記事に大きなイラストが描かれることは稀で、記事本文中に大きなイラストが入ったのは20年間で3回しかなかった。表紙にイラストが使われた2回を含めても、大きなイラストが掲載されたのは20年間でわずか5回しかなかった。以下ではこれらのうち表紙のイラスト1枚と記事中のイラスト2枚を取り上げる²⁾。

1. 新国王と新王妃

資料2-1の絵は『カラム』1961年12月号の表紙の絵である。この絵からどのようなメッセージを読み取ることができるだろうか。

絵の上の方に幕があり、中央には2人の人物の肖像



資料2-1

画が置かれている。どちらも立派な飾りを戴き、胸には勲章がいくつも見えるため、社会的地位が高い人物であることが伺える。

1961年頃のマレー・イスラム世界の主要人物と照らし合わせてみると、この男性はマレーシア(当時はマラヤ連邦)のサイド・ハルン・プトラ国王(1920~2000、在位1960~1965)であり、隣の女性はブドリア王妃であることがわかる。

サイド・ハルン・プトラ国王が即位したのは1961年9月なので、この表紙に掲載されたのは国王に即位する直前だったことになる。ということは、『カラム』は新国王と新王妃の即位を祝福して表紙に肖像画を掲載したということだろうか。これについて考えるには、この絵の肖像画以外の部分にも目を向ける必要があるが、以下ではまず『カラム』に掲載された他の2枚のイラストを見てみたい。

1) 『カラム』に掲載された写真については[坪井 2014; 2015]を、広告については[光成 2014]を参照。

2) 今回取り上げなかった2枚のイラストは、離婚率の高さ(表紙)とインドネシアの政治家の汚職(記事)をそれぞれ題材としている。

2. ローマ字かジャウィか

次のイラストは『カラム』1954年6月号に掲載された記事に添えられたものである(資料2-2)。男性が3人いて、1人は左に、2人は右に向かっている。

左向きの男性は恰幅がよく、腹がせり出しているのに対し、右向きの男性は2人とも痩せ気味で、奥の年配の男性の姿勢は前屈みになっている。

服装を見ると、左向きの男性が西洋風の背広を着ているのに対し、右向きの男性は腰に布を巻いたマレー人の民族衣装を着ている。右向きの男性が履いているのは白い普通の靴のようだが、左向きの男性の靴は黒く、おそらく革靴だろうと思われる。また、左向きの男性が書類入れのような鞆を持っているのに対し、右向きの男性は杖か剣のようなものを持っている。

左右に向かっている3人の男性の間には標識が見える。左側にはローマ字で「ルミ」(ローマ字)、右側にはジャウィで「ジャウィ」と書かれている。標識の左右には建物があり、左側にはビルのような四角く高い建物が、右側には特徴的な尖塔をもつイスラム風の建物が見える。

標識にある「ローマ字」と「ジャウィ」とはマレー語の表記に関する2つの方法である。かつてマレー語はジャウィ(アラビア文字)で書かれていたが、欧米諸国による植民地支配を経てジャウィはしだいに使われなくなり、学校教育などを通じてローマ字が普及していった。1950年代になるとマレー語は多くの場面でローマ字で書かれるようになり、ほとんどのマレー語雑誌がジャウィからローマ字に切り替えていったが、最後までジャウィによる雑誌発行を続けたのが『カラム』だった。ジャウィからローマ字への切り替えは、独立後のマラヤにおいて、欧米への留学経験がある政治指導者たちによる経済開発が進められていく過程と並行して進んだ。『カラム』にとってみれば、ローマ字かジャウィかという選択は、単なる使用文字の選択にとどまらず、欧米式の生活様式を受け入れるのかイスラム式の生活様式を堅持するのかの選択でもあった。

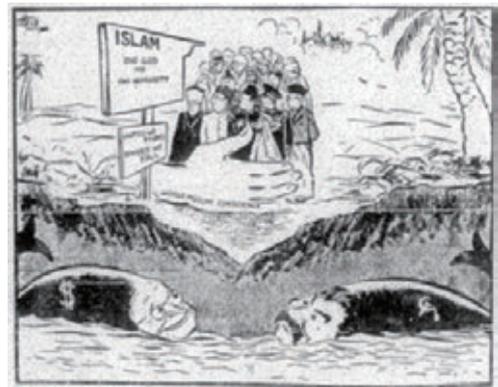
3. 団結すれば立ち、分裂すれば倒れる

次のイラストは、『カラム』の1951年4月号に掲載された記事の挿絵である(資料2-3)。

絵の中心は行く手を遮られた一群の人々で、最前列



資料2-2



資料2-3

の5人を見るだけでもさまざまな服装があるが、いずれもムスリムである。

人々の行く先は崖になっており、その下の海には人の顔をしたサメが2匹待ち構えている。一群の人々が海に落ちてくるのを虎視眈々と狙っている雰囲気だ。左側の魚の顔はアメリカのトルーマン大統領、右側の魚の顔はソ連のスターリンで、左側のサメの体にはドルマーク、右側のサメの体には鎌と槌を組み合わせた共産主義のシンボルが書かれている。第二次世界大戦後、トルーマン率いるアメリカを盟主とする自由主義陣営とスターリン率いるソ連の傘下に入った共産主義陣営に分かれ、世界の国々はアメリカ側かソ連側のどちらかにつくかが問われる状況に置かれていたことを示している。

ムスリムの一群が崖に着いたところで、目の前の海にはアメリカとソ連の二匹のサメが待ち構えている。看板には「イスラム教:一つの神、一つの間人社会」、「団

結すれば立ち、分裂すれば倒れる」と書かれている。世界がアメリカ(西側先進国)側とソ連(社会主義国)側に分かれる中、ムスリムが分裂したらどちらかの陣営の「餌」になってしまうという危機感がよく表れている。それを防ぐには、ムスリムが団結して、米ソの「餌」になるのとは違う道を選ぶ必要がある。絵の遠くにはドーム状の屋根や尖塔が特徴的なムスリムの社会のようなものが見えるので、崖から引き返してそこに向かう手があることを暗示している。

世界がアメリカ側とソ連側に分断されるという危機感は、現実のものとしてかなり強く感じられていた。創刊号である1950年7・8月合併号には韓国に関する記事がある(資料2-4)。ムスリム人口がほとんどない韓国のことをわざわざ創刊号で取り上げた背景を考えるならば、同じ国・同じ民族でありながらアメリカ側とソ連側に分かれて互いに戦争している韓国と北朝鮮の状況にかなり高い関心を持っていたことがわかるだろう。

4. 工場と伝統的家屋

本章の冒頭で紹介したイラストを改めて見てみよう。イラストの中央にあるのは即位を半年後に控えたマレーシア(マラヤ連邦)の国王と王妃の肖像画であり、肖像画の下には、二本の椰子の木の間に、遠くに二つの建物が見える。左側の建物は工場で、煙突から煙が出ており、その左側には船も見える。向かって右側の建物は高床式の家屋のようで、モスクにつきものの尖塔も見える。建物の奥に影のようなものが見えるのは木々が生き茂っていて緑が豊かであることを示している。空には白い雲が浮かんでおり、工場の煙は右側には流れてこない。

工場と伝統的家屋は隣どうしに建っているが、上で見たイラストに込められた意味などを考えると、このイラストは、自分たちマレーシアのムスリムが工業開発と経済発展を求める方向に進むのか、それとも自然環境や伝統文化を守る方向に進むのかという問いを投げかけていると理解できる。

言葉で書くと解釈の余地が狭まり、批判的な書き方をするのは難しいとしても、イラストにすれば、わかる人にはその意味が伝わるし、もしその意図が問われたとしても工場と伝統的な家屋を並べただけだと言い抜けすることもできる。書き手と読み手がメッセージを共有したときに皮肉や批判が伝わり、メッセージ



資料2-4

が共有されなければ皮肉・批判も悪意も伝わらないという風刺のあり方を見ることができる。

参考文献

- 坪井祐司 2014 「カラムが切り取った世界:写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代V:近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40) 京都大学地域研究情報統合センター、pp.9-18。
- 坪井祐司 2015 「『カラム』が切り取った世界2:1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代VI:***』(CIAS Discussion Paper No.***) 京都大学地域研究情報統合センター、pp.**。
- 光成歩「1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代V:近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40) 京都大学地域研究情報統合センター、pp.19-23。

『カラム』が切り取った世界Ⅱ

1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化

坪井 祐司

はじめに

本稿では、1953～56年を中心とする1950年代中葉に『カラム』誌が掲載した写真およびそれに関連する記事に焦点をあて、当該時期におけるマレー・ムスリム知識人の世界観を明らかにすることを試みる。

筆者は、前稿にて1950年の創刊から52年までの時期について同様の作業を行った。その結果、『カラム』誌が掲載した写真は世界中を網羅しており、それらの写真および記事は同誌の思想のさまざまな側面を代表していることを指摘した。同誌は東南アジア、南アジア、中東のイスラム世界の諸地域の動向を万遍なく取りあげただけではなく、朝鮮やベトナムの戦争やアメリカの動向など冷戦下の世界を映したニュース写真を多数掲載した。くわえて、多様な階層の女性の写真の存在は、大衆誌としての性格も示していた[坪井2014]。ただし、前稿は時期を限定した論考であり、同誌の時系列の変化という点からも考察を行う必要がある。

一方、筆者は別稿にて、マラヤの政治に関する『カラム』の論調の時代的変遷を取り上げている。ここでは、創刊当初の1950年代初頭、同誌は国境を越えたイスラムの連帯を訴える論説が中心であったが、その後民族主義的な論調が現れ、両者が併存していく状況を明らかにした[坪井2010]。写真にみられる『カラム』誌の国際情勢の報道姿勢は、この変化とどのように連関するのであろうか。本稿では、1953～56年の時期を中心に『カラム』の世界観を明らかにするとともに、それを50年代初頭からの連続性と変化という点からも考察を行いたい。

以下、第1節において写真記事の量的な分析を行い、第2節以下で地域ごとに『カラム』の視点および関連記事の内容について紹介したい。

1. 1950年代中葉における写真記事

『カラム』では、通常各号に写真のページが4ページ設けられていた。そこでは、世界各地の時事的なニュース写真が紹介され、解説がつけられている。1953～56年の第30号から77号までの写真のコーナーにおいては、以下のような地域の写真が掲載された。

表1 地域別の『カラム』写真記事の件数(1953～56年)¹⁾

インドネシア	39	イギリス	2
マラヤ	36	インド	2
シンガポール	19	パキスタン	2
エジプト	5	ブルネイ	2
サウジアラビア	5		

出典:CIAS「カラム」データベース(<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)

ここからいえることは、発行地であるシンガポールをはじめ、隣国のマラヤ、インドネシア、ブルネイなどイスラム圏東南アジアが関心の主たる対象であるという点である。筆者は前稿にて1950～52年の時期について同様の作業を行ったが、その結果は最も多かったのがインドネシア、次いでパキスタン、エジプトの順であった。それ以前と比べて、近隣地域の報道の比重が高まっているといえる。この時期のインドネシア、マラヤは、総選挙が行われるなど、政治上の重要な転機を迎えていた。『カラム』誌においても地元の政治情勢への関心の高さがうかがえる。

東南アジア諸国に続くのは、中東(エジプト、サウジアラビアなど)、南アジア(パキスタン)といったイスラム世界の国々である。ただし、相対的にみてこれらの地域への関心は1950年代初頭ほどに高いとはいえない。エジプトのスエズ運河をめぐる国際関係や、サウジアラビアやイランにおける石油問題などがとりあげられているが、パキスタンなどについてはこの時期には散発的に取り上げられるのみとなった。

1) 写真の撮影地(被写体ではない)ごとに分類したもの。このほかに1ページのみ地域が7か所(アルジェリア、イラク、イラン、タイ、トルコ、中国、南アフリカ)ある。

それ以外の地域に関しては、50年代初頭は朝鮮戦争に関心が集まったのに比べて、明らかに注目された事象はみられない。ただし、写真ページでは取り上げられなかったとしても、記事のなかに関連する写真が掲載されていることも多い。そのなかで、非イスラム世界で最も頻繁に取り上げられたのはアメリカであった。東南アジアとは全く異なる景観の写真が掲載され、東南アジアのムスリムからみた同時代の社会が描かれたのであった。

以下、第2節では東南アジア(マラヤ、インドネシア)、第3節では中東のイスラム世界、第4節ではアメリカおよびその他の地域について、それぞれどのような写真が掲載され、解説がなされたかを検討したい。

2. 東南アジア——選挙とイスラム勢力の動向

本節では、マラヤ、インドネシアを中心とした東南アジアのイスラム圏における写真報道を通じて同誌のスタンスを明らかにする。前節で述べたように、この時期の『カラム』では、マラヤ、インドネシアに関する報道・写真の比率が大幅に高まった。1955年にはマラヤ、インドネシアで総選挙が行われた。この総選挙は、両地域のその後の政治体制の帰趨を決定する重要な分岐点であった。

『カラム』は、この両地域の選挙には大いに関心を示した。ただし、二つの選挙結果は同誌が期待したものではなかったと思われる。イギリス自治領下のマラヤでは55年7月に連邦議会の総選挙が行われ、連盟党が52議席中51議席を占め、大勝した。連盟党は、マレー人(UMNO)、華人(MCA)、インド人(MIC)の各民族を代表する政党が連合した組織であり、マラヤは多民族国家として独立の道程を確保した。一方で、同年9月にインドネシアで行われた総選挙においては、国民党(57議席)、マシユミ(Masyumi、57議席)、ナフダトゥル・ウラマ(Nahdatul Ulama、45議席)、共産党(39議席)らが議席を分け合い、議会に絶対的な多数派が形成されないままスカルノの独裁体制への道が開かれていった。イスラム勢力は、いずれも十分な代表権を確保できなかったのである。

マラヤにおける政治ニュースは『カラム』において逐一報道されたが、総選挙における連盟党の大勝については、大々的に報じられたとはいいがたい。『カラム』はUMNOが宗教を軽視していると非難しており、同党の他民族の政党との連携についても批判的で

あった。1953年にはUMNOの抗議によって『カラム』が燃やされるという事件が起こっている[Talib 2002: 10]。同党と『カラム』とは、対立関係にあったのである。それでも、1955年9月の第62号では、写真記事と社説で総選挙が取りあげられた。写真には、「UMNO-MCA-MICによる連盟党の勝利を受け、UMNOがクアラランブルに本部を開く」と題して、スランゴル州スルタンの出席のもとでクアラランブルに本部が設置される様子や、「連盟党の勝利における女性の力(Tenaga Wanita dalam Kejayaan Perikatan)」として、唯一の女性候補者となったハリマートン女史(Cik Halimahton)の演説などがみられる(資料3-1)[Qalam 1955: 19-21]。

同号の社説「連盟党の勝利(Kejayaan Perikatan)」では、連盟党が52議席中51議席を獲得した事実を伝え、同党がマラヤ連邦を統治するための十分な信任を得たとしながらも、「注意すべきは、連盟党の勝利の後、ペラの華人がすぐに中国とインドの言語を英語・マレー語にくわえて公用語とすべきと主張した」こと、市民権の要件の緩和も要求したことであると指摘した。このことは、マレー人の組織としてマレー人のために働くことを任じ、マレー人の利益に関心を集中させるというUMNOにとって試金石となると主張した。連盟党内で外来民族との間で利害が対立したと



資料3-1



資料3-2

き、マレー人の利益を守れるのかが問われているというのである。外国資本の進出や、教育問題(華人が小学校で自らの言語を使うだけではなく、中学・高校、大学まで作ってしまった)のようにマレー人の利益が脅かされかねない問題に関して、UMNO(と連盟党)の成功はマレー人の権利を守れるかどうかにかかっている。そして、それは結果が証明するだろうと突き放した見方を示したのである[Qalam 1955.9: 34]。

その後、UMNO党首のアブドゥルラーマンはロンドンでイギリス政府との独立交渉に臨むことになった。1956年2月の第67号に掲載されたアブドゥルラーマンと連盟党の使節団のロンドン出発の写真では、以下のような説明がつけられた「首席大臣アブドゥルラーマンは、連盟党の使節団の団長として、自分たちの政府というマレーの市民の夢を実現するため、イギリス政府との交渉のためロンドンに出発した。…彼は独立を叫ぶ民衆に囲まれていた。彼は誇りあふれる叫びを見て責任の重大さを感じたにちがいない。涙を流し、議論を成功させられるだろうかと考えた」(資料3-2)[Qalam 1956.2: 24-25]。

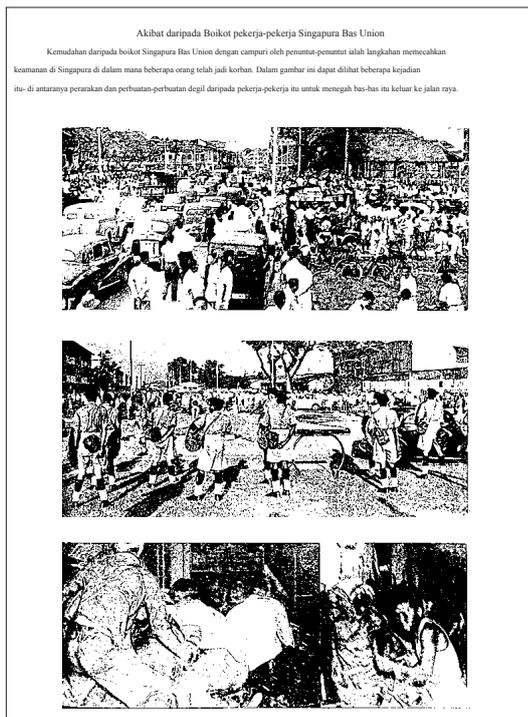
ただし、この号の写真ページの構成は、UMNOや連盟党に対する『カラム』の態度を示しているようで興味深い。ラーマンの写真の前後にUMNOに対抗する勢力も取り上げられているのである。先のラーマンのロンドンへの出発の説明には、「チンペン(Chin

Peng) との話し合いが決裂した後」という注記がついている。次ページには、1948年から武装闘争を繰り広げてきたマレー共産党のチンペンらと政府との会談(パリン会議、1955年12月)の写真も掲載された[Qalam 1956.2: 26]。また、前ページにはマレー人左派の流れをくむマレー人民党の結党大会(1955年11月)がとりあげられ、ブルハヌッディン・アルヘルミ(Burhanuddin Al-Helmy)とアフマド・ブスタマム(Ahmad Boestamam)が演説を行った写真が掲載されている[Qalam 1956.2: 23]。

ほかにも、『カラム』はUMNO以外の政治組織も積極的に取り上げている。第58号(1955年5月)では、同年4月の「マレー青年会議の大会が大成功を収めた(Kongres Pemuda Melayu Diterima Kejayaan yang Besar)」として、全マレー青年会議のクアラルンプルでの写真を掲載した。そこでは、マレー語、マレー民族、マレー国家のために戦うこと、左派も右派もその目標の達成を目指すことなどが掲げられた。大会は「一部勢力は大会を貶めようとし、UMNOにはボイコットされたが、大会は大いなる関心を持って迎えられた」という。大会にはダト・オン(Dato Onn)も姿を見せ、マレー語とマレー国家を目指して戦うと認めたといい[Qalam 1955.5: 20-21]。前述のマレー人民党とあわせて、『カラム』の立場はこちらに近かったと思われる。

ただし、イスラムを基盤とする『カラム』は共産主義勢力の活動には一貫して批判的であった。『カラム』のおひぎ元のシンガポールにおいて大きくとりあげられたのは、バス組合のストライキであった。第59号(1955年6月)には、「バス組合のボイコットと学生の介入によりシンガポールの平和は破られ、数人が死亡した」として、職員がバスを取り囲んでいる写真が掲載された(資料3-3)[Qalam 1955.6: 44]。同号の社説では、騒動において共産党を支持する華語学校の学生が暴れたことをリークアンユーらの扇動によるものと非難し、イギリス当局の対策を手ぬるいと批判した[Qalam 1955.6: 1]。

インドネシアでも、1955年は二つの大きな政治的なイベントが注目された。4月にバンドンで行われたアジア・アフリカ会議と、9月に行われた総選挙である。第59号(1955年6月)には、アジア・アフリカ会議の写真が多数掲載されている。会議に関する写真記事のページでは、「西洋諸国によるものであれ、ロシアによるものであれ、植民地支配の撲滅を目指す」と決議



資料3-3



資料3-4

されたことが紹介された。インドネシアが主催国として多くの予算を拠出したことが強調されるとともに、パキスタン、エジプト、ビルマ、ラオス、インドネシアなど各国の代表団が掲載された(資料3-4)[Qalam 1955.6: 20-21]。マラヤは独立国ではなかったが、ブルハヌッディン・アルヘルミが代表としてバンドンを訪れた。これにはマレー人指導者からの批判も起こったものの、支持者たちが彼を迎えたという[Qalam 1955.7: 20-21]。

9月の総選挙に関しても高い関心が示された。しかし、総選挙の結果はイスラム勢力にとって期待したものとはならなかったためか、選挙そのものに関する写真はほとんどみられない。記事では、エドルスがインドネシア総選挙について第69号(1956年4月)で以下のように整理している。イスラム勢力は過半数を得ることに失敗したが、これは主要なイスラム政党の分裂のためであった。ナフダトル・ウラマとイスラム同盟党(Partai Sarikat Islam Indonesia)²⁾はマシュミとことあるごとに対立し、マシュミをイスラムの教えから逸脱していると非難した。このことが共産党に39議

2) 同党の前身であるイスラム商業同盟は、インドネシアにおけるイスラム運動の草分けであった。第63号(1955年10月)では、インドネシアにおけるイスラム運動50周年の祝賀の様子が掲載された。イスラム商業同盟は、1905年10月16日のキャイ・ハジ・サマンフディ(Kiyai Haji Samanhudi)により始められた。彼はまだ存命中で記憶は鮮明であり、まだメガネなしで読むことができたという[Qalam 1955.10: 26]。

席を得るといふ勝利をもたらしたのであった。このため、イスラム政党は過去の分裂を忘れて一致結束すべきであると結論付けられたのである[Qalam 1956.4: 3-5]。

インドネシアのイスラム勢力として、『カラム』が支持していたのはマシュミであった。党首ナツシル(Mohammad Natsir)の論説は、同誌に多数掲載されている。1955年12月の第65号ではマシュミの10周年記念式典の写真が掲載され、「この10年間は、マシュミがインドネシアにおけるイスラムの主権を追求するための聖戦として想起される」と論評された[Qalam 1955.12: 23]。翌月の66号では、「マシュミの10年(10 Tahun Masjumi)」というナツシルの文章が掲載され、10年間のマシュミの歩みを回顧するとともに、横暴な商売や独裁政治を廃止する、貧困を撲滅するなど様々な点で革命的な性質(tabiatnya satu revolusi)を持っていることを主張した。そして、個人、社会、国家においてイスラムの教えを実現していくことを訴えた[Qalam 1956.1: 10-13, 41]。

インドネシア大統領のスカルノは、この時期でもしばしば表紙や写真記事に取り上げられている。ただし、その評価は必ずしも英雄的指導者としてのものではなかった。第65号では、スカルノの結婚も批判の対象となった。表紙ではスカルノと第二夫人のハルティニとその子供の写真が掲載され、なかほどの写真記



資料3-5

事でもとりあげられた(資料3-5)。そこでは「スカルノとハルティニは多く人びとの反対にあっている！(Sukarno dan Hartini di hadapan Khalayak Ramai Dibantah!)」と題され、スカルノの第二の結婚は大きなニュースとなったものの、多くの女性が反対していると紹介された。女性たちは、ファーストレディは第一夫人のファトマワティしか認められないと感じているというのである。ファトマワティも結婚後スカルノの巡礼に同行しなかったという[Qalam 1955.12: 24-25]。

主筆エドルスはしばしばスカルノ大統領を批判した。総選挙後の第66号(1956年1月)において、エドルスはスカルノが西イリアンの帰属をめぐる対立したオランダの企業のボイコットに言及したことを例に、彼が首相や内閣の意向を無視した発言を繰り返しているとしてその独裁を批判した[Qalam 1956.1: 8]。さらに、エドルスはスカルノがイスラム国家を否定してパンチャシラ国家を目指していると批判した。1955年12月メダンにおける演説において、スカルノは「共産主義国家を望むのか、帝国主義国家を望むのか、インドのような国家を望むのか、あるいはイスラム国家を望むのか」と問い、そのすべてを否定して国民党の原則であるパンチャシラを強調した[Qalam 1956.1: 8-9, 39-42]。多様性のなかの統一をうたい、イスラム色の薄いパンチャシラの原則はイスラム勢力にとって

は批判の対象であった。

一方で、創刊当初みられていた、マラヤとインドネシアの政治的境界を越えたムスリムの政治的連帯を訴える記事や写真はあまりみられなくなった。そのなかで、とりあげられたのが両者をつなぐ存在であるマレー語、ジャウイであった。第34号(1953年5月)には、インドネシアにおけるジャウイ雑誌を集めた写真が掲載された。雑誌「闘争(Berjuang)」はイスラムにもとづき、共産党の宣伝に毒されないように説いているという。オランダによるジャウイからローマ字への切り替えのため、ジャウイの識字率はインドネシアでは高くはないが、「この写真を見て、まだインドネシアではジャウイが好まれないと思うだろうか?」というのである。マシュミ党首のナシルは、総選挙において、村落地域ではジャウイが役に立つだろうと述べたという[Qalam 1953.5: 9]。

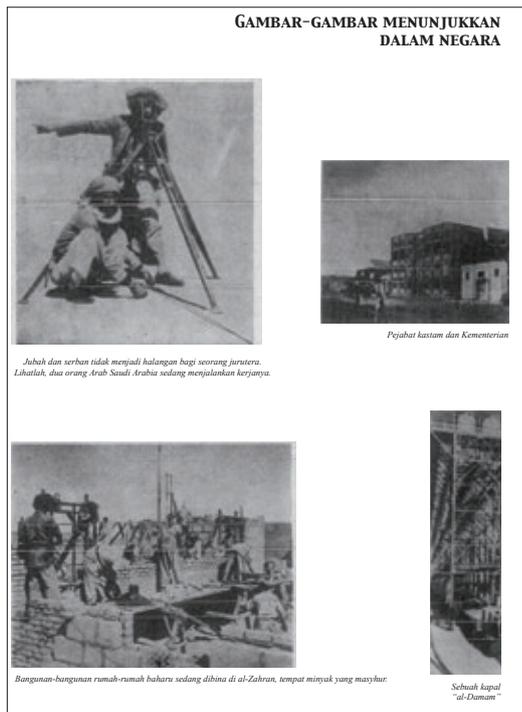
第75号(1956年10月)の写真記事では、「マラヤ・インドネシアのマレー語の統合は重要このうえない！(Penyatuan Bahasa Melayu Malaya Indonesia Terlalu Penting!!!)」として、マラヤマレー語連盟の第3回大会の様子が報じられた。この会議は、マラヤとインドネシアのすべての層のムスリムの衆目を集めたという。言語は民族精神の発展に重要であり、マレー語がマラヤの唯一国語となることが重要と考えられた。さらに、インドネシア政府との緊密な連携によりマラヤのマレー語との同化をはかることで、同じマレー語が東南アジアの全域にて使用されることになると指摘された[Qalam 1956.10: 24-25]。

3. イスラム世界——石油問題への関心

『カラム』は、中東を中心とするイスラム世界に高い関心を示し続けた。この時期の話題の中心となったのは石油であり、石油がもたらす富がイスラム世界に何をもたらすかという点であった。

たとえば、第30号(1953年1月)では、国名は明らかではないが、砂漠における油田の写真が掲載され、「中東の不毛な平野は今や世界有数の石油生産地になっている。そこに富が出現し、その富から彼らの道徳(budi pekerti)の変化がもたらされるだろう」と指摘した[Qalam 1953.1: 46]。

産油国の現状も報告されている。第33号(1953年4月)では、写真記事にてサウジアラビアの近代化が紹介された。そこでは、「ローブ(Jubah)やターバンは技



資料3-6

術者にとって障害とはならない」として、働くムスリムが紹介されるとともに、ペルシャ湾のタンカーや石油ポンプ、首都リヤドの高いラジオ塔、近代的な政府庁舎、建設中の家屋の写真などが掲載された(資料3-6)[Qalam 19534: 24-25]。次のページでは、隣国の「イラクの発展と変化(Kemajuan dan Pembaharuan Iraq)」として、バグダードの電話局で働く女性、綿花工場が紹介された[Qalam 19534: 26]。

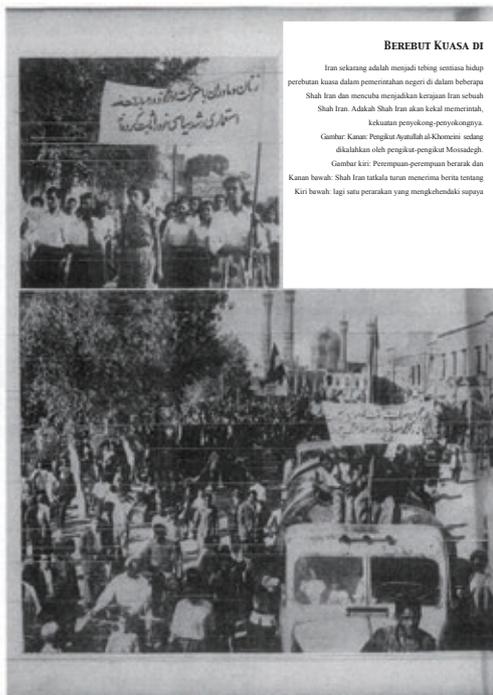
同号では、エドルスが「現在のメッカの開発と発展(Pembangunan dan Kemajuan Mekkah Sekarang)」という文章を書き、サウジアラビアの発展について、マラヤに25年間住んでいたというシャイフ・アブドゥルラーマン(Sheikh Abdul Rahman)という人物の報告を紹介している。記事によれば、国王アブドゥルアジズのもと、大規模な開発が進められている。この開発の財源に「巡礼税」が占める割合は10%以下であり、それだけではとてもこのような規模にはならなかったとされる。石油収入はメッカ、メディナ、ジェッダといった諸都市や交通を改善しているが、これは巡礼者にとっての利便性の向上ともなっている。病院が建てられたことは、巡礼時に問題となる交通事故への対応にもつながるためである。同時に、この地域の一番の問題となる水供給のため、パイプラインが建設されている。水は新しく整備されたジェッダ港に運ばれている。水は現在のジャカルタよりも豊富にあるとインド

ネシア人は述べているという。教育も充実しており、村に学校が建設され、豊富な奨学金により留学ができる。孤児にも教育が与えられる。サウジは資金が豊富なので、巡礼税は廃止すべきという声もあるが、ムスリムはヒジャーズ地域外からの税収により巡礼税以上の資金が投じられ、開発がなされていることを喜ぶべきであり、そのような意見は冷静に見守るべきであると述べられている[Qalam 19534: 15-18]。

イランも産油国として注目された。第12号(1951年7月)では、イラン政府によるアングロ・イラニアン石油会社の国有化問題が扱われた。イギリスが海軍を派遣し、パラシュート部隊を準備したとして、イランでは戦争の危機と受け止められている。イランは強硬姿勢で、もし戦争になれば第二の朝鮮となると懸念された[Qalam 19517: 19]。

この記事では、イランの石油の歴史が紐解かれている。イランの石油採掘は、1902年にイギリスが40年間のリースを受けたことで始まり、アバーダーン油田の開発のためアングロ・ペルシャ(のちにアングロ・イラニアン)石油会社が設立された。1914年に海軍大臣となったチャーチルは石油の重要性に目を付け、イギリス政府は会社に50%の資本を出資した。第二次大戦後、ソ連が北から進出してきたため、1948年にイラン政府は北部の油田の採掘許可をソ連に与えることを迫られた。そのなかで、アングロ・イラニアン会社の国有化問題は爆弾となった。サウジアラビアでは、最近アメリカの石油会社とサウジ政府が協定を結んで利益を分け合うことを決めたが、イランではイラン政府が権利を要求した。ただし、輸送手段も持つ欧米の大手石油会社は権力が強く、イラン政府も最終的には大企業との協定に従わざるを得ないだろうとみられている。イランを中心とする中東の石油は重要性を増しているため、アメリカなどが中東に関心を高めている。石油問題は経済問題のみならず政治問題でもあると指摘された。記事の最後では、イラン(3,180万トン)、サウジ(2700万トン)、クウェート(1720万トン)といった中東諸国およびアメリカ(2億7000万トン)、ベネズエラ(7800万トン)、ロシア(2700万トン)、インドネシア(700万トン)など世界各国の石油産出量がまとめられている。石油に対する『カラム』の関心の高さがうかがえる[Qalam 19517: 19-23]。

イランの政情は2年後転換する。第38号(1953年9月)では「イランの権力闘争」が扱われている。石油国有化政策を進めたイラン首相モサッデグはクーデタによ

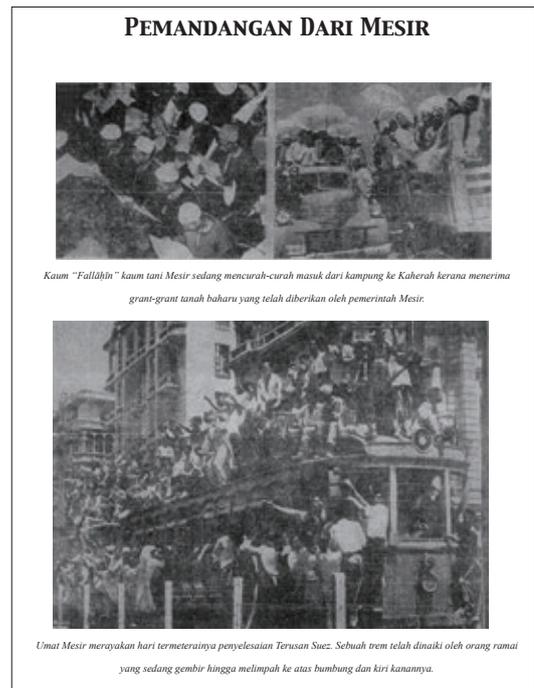


BEREBUT KUASA DI

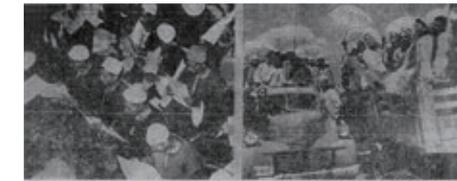
Iran sekarang adalah menjadi lebih sentiasa hidup peribatan kaum dalam pemerintahan negeri di dalam beberapa Shah Iran. Adakah Shah Iran akan kekal memerintah, kekuatan penyokong-penyokongnya.

Gambar: Kanan: Pengikut Ayatullah al-Khomeini sedang dikalahkan oleh pengikut-pengikut Mossaddegh.
 Gambar Kiri: Perungguan-perungguan botarik dan Kanan bawah: Shah Iran tafakur dalam menerima berita tentang Kiri bawah: lagi satu perarakan yang menghebohkan supaya

資料3-7



PEMANDANGAN DARI MESIR



Kaum "Fellāhīn" kaum tani Mesir sedang mencurah-curah masuk dari kampung ke Kaheerah kerana menerima grant-grant tanah baharu yang telah diberikan oleh pemerintah Mesir.



Umat Mesir merayakan hari termeterainya penyelesaian Terusan Suez. Sebuah trem telah dinaiki oleh orang ramai yang sedang gembira hingga melimpah ke atas bumbung dan kiri kanannya.

資料3-8

り失脚し、皇帝パフラヴィが権力を握ったのである。写真は、モサッデグが国王を追放して共和制としようとしたが、王の支持者がモサッデグを追い出したと紹介されている。ほかには、モサッデグ支持者に排除されるホメイニ支持派、投票権を求める女性の行進、モサッデグ失脚の報を聞く国王、議会解散を求めるデモなどが紹介された(資料3-7)[Qalam 1953.9: 20-21]。エジプトでは、スエズ運河の国有化とそれに続く第二次中東戦争(スエズ動乱)が国際的関心を集めた。1952年のクーデタにより王政が廃止され、ナーセルが首相として権力を掌握していった。ナーセルは54年にイギリスとの条約によりイギリス軍をスエズ運河から撤退させることに成功する。第51号(1954年10月)では、「エジプトがスエズ運河の解放の日を祝う」として、多くのエジプト国民が街頭に集う写真が掲載された[Qalam 1954.10: 21]。翌月の第52号でも、政府からの補助金を受け取るために大挙として村からカイロに入ってきた農民の写真とともに、スエズ問題の解決を祝福するムスリムとして、人であふれるトラムの写真が掲載された(資料3-8)[Qalam 1954.11: 19]。

スエズ動乱は、1956年7月のナーセル大統領によるスエズ運河国有化により引き起こされた。第74号(1956年9月)では、「スエズ運河の出来事が全世界の注目を集める」として、ポートサイドのスエズ運河会社の事務所に緑に月星のエジプトの旗が翻った写真

が掲載された。スエズ運河会社のCSという青い旗は降ろされ、エジプト民衆はスエズ運河国有化宣言を受けて歓呼の声を上げたという[Qalam 1956.9: 24-25]。第77号(1956年12月)の社説では第二次中東戦争がとりあげられた。同年10月にイスラエルがエジプトを攻撃し、イギリス・フランスもスエズ運河の確保を目指して介入した。イギリス軍はポートサイドを占領したものの、イギリスの政策は中東諸国ばかりでなくアメリカや東南アジア諸国の反発もよんだ。アメリカ大統領アイゼンハワーはイギリスの行動が第三次世界大戦を招くと述べたという。国内の野党も政府の行動はイギリスの地位を落とすものとして批判した。大英帝国が衣替えしたコモンウェルスもこれにより傷つきかねないと論じられたのである[Qalam 1956.12:1-2]。

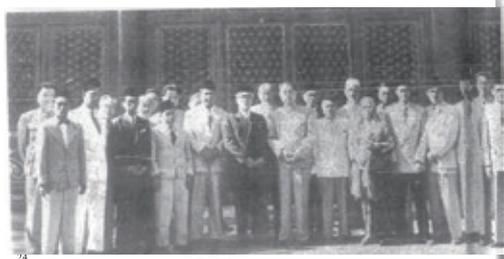
4. アメリカとソ連・中国——冷戦と近代へのまなざし

非イスラム世界に対する『カラム』の関心も維持されていた。アメリカにくわえて、中国、ソ連といった共産主義諸国も取り上げられた。

中華人民共和国の状況はたびたび言及された。第72号(1956年7月)では、増ページ(tambahan)として、「ムスリム使節団が中国で歓迎される」という記事が掲載された[Qalam 1956.2: 1a-4a, 47-52]。インドネシアからのムスリムの代表団が中国を訪問した際の様子が



Kepada rombongan-rombongan Islam Indonesia dan Pakistan di negeri yang baik. Layanan yang memuaskan sehingga harus ada di antaranya keadaan negeri China itu – bacalah rencana yang diteliti Qalam keharuan ini. Gambar-gambar di atas dari kiri – jaman Urumsq. Di tengah jaman yang diadakan oleh Naib Yang Di-Pertua Tuan Haji Sirajuddin Abbas (yang bersongkok) dengan Sinkiang Saif al-Din 'Azizi di Urumsq. Gambar bawah kiri – kaman rombongan Indonesia kehar dari sembahyang hari raya. Gambar tengah kiri: rombongan Pakistan – kaman rombongan Islam Indonesia di keretapi – gambar-gambar khas bagi Qalam.



資料3-9

報じられたのである。彼らはシンガポールに寄港してエドルスの家で歓待され、インタビューを受けた。写真記事では、インドネシアとパキスタンの代表団が新疆のウルムチのウラマとともに撮った写真や、モスクにおける周恩来との写真などが掲載された(資料3-9) [Qalam 1956.7: 23-26]。

記事によれば、インドネシア代表団が調査した結果、北京のムスリム協会は1000万人であった。第二次世界大戦前のムスリム人口は3000~5000万人であったものの、蒋介石政府の弾圧により1000万人になってしまったのである。王朝、蒋介石時代は抑圧されたが共産党政権になって自由になったという言説もあるものの、記事はそれに懐疑を示す。広東のモスクは築100年超であるなど、共産党政権になってから建設されたモスクはない。アズハルに留学した指導者も老人であり、留学は共産党政権以前のことである。イスラムやアラビア語を教えているところは見学できなかった。戦前のようなイスラム組織がまだあるのかは不明であり、国民党政権以前と比べて抑圧が強まったとはいえなくとも、弱くなったともいえないというのである。共産党政権下における集団主義も批判の対象となった。社会主義のもとで商業は抑圧されている。ムスリム個人が行うべき喜捨や巡礼ができなくなっているというのである。一方で、ウルムチには「自分は共産主義者ではなくムスリムである」という人も多

く、共産主義が宗教を消し去ることはできないとも論じられている [Qalam 1956.2: 1a-4a, 47-52]。

第61号(1955年8月)の記事「中国と東南アジア (Cina dan Asia Tenggara)」では、海外の華人について特集されている。著者はザハリ (Zahari, メダンの日刊紙ワルタ・ブリタ Warta Berita, 週刊誌ワクトゥ Waktu の編集者と紹介されている) であった。中国の統計によれば、海外在住の中国人はアジア、アメリカ、ヨーロッパに800万人にのぼる。インドネシアでは総人口の2.5%で200万、マラヤでは43%の250万人など、東南アジア各地のプラナカン(現地生まれ)を含む中国系人口が推計されている。ここで問題となるのは国籍についてである。中国国内の法律においては、各民族が平等な地位を認められていること、少数民族の地域では自治区が設定されていることなどが解説される。さらに、海外の華人の国籍問題について、現在では各国の国籍を取得しているケースが多いことが指摘される。台湾の中華民国国籍を選択することもできる。インドネシアの華人のなかで、インドネシア国籍と中国国籍を希望者はそれぞれ半々であり、強い者につこうとする傾向があるという [Qalam 1955.8: 23-29]。

社会主義大国のソ連についても、同じくインドネシア人による訪問記が掲載されている。第72号(1956年7月)のなかで、マシュミの指導者でもあるザイナルアビディン・アフマド (Zainal Abidin bin Ahmad) を団長とするインドネシア議会代表団がシンガポールで会見し、訪問したソ連の宗教に対する姿勢を語っている。彼は50メートルもの道幅がある道路があるなど、モスクワの発展ぶりを称賛したものの、共産主義には批判的であった。記事によれば、ソ連においては、国民は国家の道具となっている。これは、所有権が否定されているからにはかならず、国民がどこでも移動させられる。信教の自由については、教会にもモスクにも自由はあると述べている。ただし、モスクはモスクワに1か所あるものの、ムスリム人口の1万人に対しては少ない。宗教学校はなく、共産主義の学校のみであり、モスクに政府からの援助は一切ない。共産主義が他国で繁栄するのかといえば、否である。他国では所有権と自由を所持している。ロシアで共産主義が受け入れられたのは、人々が皇帝や封建領主に押さえつけられて権利を持たなかったからである。ただし、フルシチョフのもとで所有権を与えられ始め、車を持てるようになりつつあるとも述べられている [Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。

berkata dan dilihat di mana-mana tempat di dalam dunia ini tidak ada perdamaian yang jelas-jelas apakah ada kuasa dari Tuhan yang tuannya katakan itu-kita jurubahasa itu kepada beliau.

Mendengar jawapan itu beliau meneringkan bahawa Tuhan entinya perdamaian kepada agama-agama lain. Tetapi pada kami yang ada perdamaian yang kekal abadi itu hanya ditaklukkan oleh Tuhan kepada malaikat. Kami berkeyakinan bahawa di dalam dunia ini ada 3 makhluk dijanjikan Tuhan iaitu malaikat yang kerjanya berbuat baik dan kebajikan dengan aman dan sejahtera dan ada pula iblis yang tujuan dan kerjanya merosakkan. Kedahlan kami sebagai makhluk salah di antara yang kedua itu kami berpendapat bahawa kami dihidup dan ditugaskan berjuang untuk mendapat yang baik dan berjuang untuk menjaukan daripada kejahatan. Dan inilah entinya hidup pada kami dan sebab itu kami diberi kekuasaan untuk berkhidmat dan berjuang untuk mendapat perdamaian dan kesejahteraan dunia. Dan dengan tidak ada perjuangan tidak ada entinya hidup dan tidak akan didapat kumanaan dan kesejahteraan dengan begitu sahaja. Rupanya sesudah mendengarkan keterangan beliau jurubahasa itu merasa kelemahannya dan terdapatnya beliau berpendapat bahawa sebenarnya keadaan itu kurang pengertian dan kurang pembawaan yang diberikan kepada mereka.

Saudara Zaimal Abidin menerangkan juga bahawa pengertian persamaan hak di antara lelaki dengan perempuan berlainan dengan pengertian di lain-lain tempat. Dasar persamaan ini diasaskan pada dasar "tidak ada kerja", "tidak ada no". Dasar ini sudah menjadikan tiap-tiap orang mesti bekerja - lelaki perempuan - tua muda - semuanya bekerja untuk mendapatkan roti.

Jika di dalam alam kita erit perkahwinan itu dimukakan wanita menyerahkan dirinya bagi



Muslim-muslimat di Poland utara yang masuk keur ibunya di dalam menghadapi hampatan di antara orang-orang atika dan agama-agama lain.

diperlindungi - sama ada di dalam pebelakangan hidup sehari-hari atau pun di dalam keadaan dirinya - di Rusia yang demikian itu lain keadaannya kerana perempuan juga ada bekerja seperti lelaki yang tidak akan berharap kepada bantuan lelaki. Dengan keterangan keadaan ini maka besapangan di antara lelaki dengan perempuan itu tidak ada pertaliannya lagi selain daripada sama-sama - dan kalau sudah sama-sama maka boleh berkumpul dengan tidak payah berkah lagi - tidak dipaksa untuk mendefinikan diri mereka tentang percampuran itu.

Kalau sudah sama-sama tidak suka lagi - mereka boleh berpisah dan tunda bagi perceraiannya mereka ialah kalau salah seorang daripada mereka - yang lelaki salah suka pula kepada wanita lain atau wanita telah suka dan bersatu pula dengan lelaki lain.

資料3-10

他のヨーロッパ諸国への言及も見られる。ポーランドなど近隣の共産化された国々では、愛国心が完全に捨て去られてはいない(資料3-10: ポーランド北部のムスリム女性)。一方で、ドイツ、フランス、イタリアなど西欧の国々については民主主義の原則や宗教にもとづく協調精神の強固さに感銘を受けたという[Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。

最後に語られたのは男女平等についてであった。男女平等とは、老若男女ともに、「働かざる者食うべからず」ということであり、女性も男性同様に生活のために働くということである。その場合、結婚は男女が愛し合うことにほかならず、愛情がなくなれば別れてしまうということであると論じられた[Qalam 1956.7: 7-9, 41-42]。

一方で、資本主義陣営のアメリカに関する記事・写真も少なくない。前稿[坪井 2014]でも触れたが、『カラム』にはアフマド・フサイン(Ahmad Hussain)という人物がたびたびアメリカに関する記事・写真を寄稿している。彼は第15号(1951年10月)に「アメリカからの手紙(Surat dari Amerika)」として最初の記事を寄稿した。その後、第24号(1952年7月)から「遠くからアメリカを見る(Melihat Amerika dari jauh)」という題名となり、1954年4月の第45号まで計10編の記事が掲載された。第24号には、彼がヴォイス・オブ・アメリカ(Suara Amerika)に所属しており、記事が当局



Pemandangan dalam sebuah jalan di New York

- Gambar Ahmad Hasan

Amerika Syarikat. Di atas bumi pula ada beberapa banyak kereta yang tak dapat dikira. Lain daripada itu ada beberapa banyak pula manusia.

New York ialah sebuah bandar yang sesak dan sibuk. Seorang yang baharu datang ke bandar ini harus berusa keliru. Pada waktu pagi kereta-kereta bas dan keretapi-keretapi bawah tanah semuanya penuh sesak dengan penumpang-penumpang yang hendak pergi bekerja di pejabat dan kilang. Beribu-ribu buah motorcar pula mengalir masuk ke dalam bandar membawa orang-orang yang bekerja dan mempunyai kerja di bandar. Demikian juga halnya pada waktu petang.

Kepada seorang yang baharu datang keadaan waktu pagi itu ialah satu pengalaman yang berkesan. Perhentian-perhentian keretapi dan bus, orang berusau-susau mengasak bus dan keretapi yang sudah penuh. Mereka yang di belakang menolak mereka yang di hadapan. Penulis tidak berpelehang melihat hal keadaan di bandar-bandar besar yang lain dalam dunia. Akan tetapi pada pandangan penulis orang-orang New York ini ialah terbilang antara manusia yang cukup talam.

Dalam karangan saya yang lalu saya telah pun menyebut bagaimana sabarnya drebab-drebab motorcar Amerika. Manakala mereka keluar dari bandar New York dalam musim panas.

Penulis melihat bahawa dalam bandar New York ini nampaknya tak ada seseorang pun yang suka melepaskan kereta. Baik bus atau kereta api. Baik pun berjalan, orang-orang



Di bawah jalan raya ini terlihat perhentian keretapi. Gambar menunjukkan suatu pemandangan di Manhattan Avenue - Gambar Ahmad Hasan

diduduki oleh Setiausaha Bangsa-bangsa Bersatu. Dalam kawasan itu juga ada lagi sebuah bangunan yang besar dan rendah, iaitu bangunan pemukiman orang ramai.

Pada waktu malam dari bangunan Empire State kelihatanlah berjuta-juta cahaya lampu di Pulau Manhattan dan di kawasan-kawasan di seberang sungai Hudson dan sungai timur. Satu tempat yang gilang-gemilang pada waktu malam ialah kawasan Time Square. Akan tetapi dari atas bangunan ini seorang yang datang dari negeri asing tidak akan mengetahui betapa hebatnya pemandangan di Time Square itu yang menjadikan kawasan itu tiada tolak banding indahnya pada waktu malam di seluruh bandar New York.

Di atas bangunan Empire State hal keadaan tenang sahaja iaitu keadaan yang jauh berbeza dengan hal keadaan di bawah. Di bawah bandar New York beberapa banyak kereta api sedang berjalan ke serata cerok bandar dan seluruh negeri

資料3-11

とアメリカ国務省の公認のもと『カラム』に提供されたものであることが明記されている[Qalam 1952.7: 11]。

彼はニューヨーク在住であり、第15号の最初の記事では、102階建てのエンパイアステートビルや6,200人収容のコンサートホール、525の鉄道駅があることなど、ニューヨークの都市の威容が語られる。そして、ポーランド、スウェーデンなどヨーロッパ各国にくわえてアラブ人、インド人など、多様な民族的出自を持つ住民により社会が構成されていることが指摘される。さらに、ニューヨーク在住のマレー人、インドネシア人の有力者の経歴が記載されている[Qalam 1951.10: 16-18]。

続く5編の記事では、ニューヨークの名所や暮らしの様子が描かれる。第15号ではセントラルパークの休日の様子、第34号(1953年5月)ではエンパイアステートビルからの夜景の素晴らしさが描かれ、カフェテリア、ドラッグストア、ソーダスタンドといったアメリカの都市の大衆消費文化が説明されている(資料3-11:マンハッタン大通り)[Qalam 1953.5: 10-14]。第36号(1953年7月)ではコロンプス広場がとりあげられ、車、バス、ローラースケートをする子供たちなど、「コロンプス像を近代的な生活が取り囲んでいる」さまが描かれる[Qalam 1953.7: 19-22]。第37号(1953年8月)では自然史博物館、メトロポリタン美術館といった文化

施設が紹介され [Qalam 1953.8: 27-31]、第38号 (1953年9月) では国際連合本部が紹介された。そこでは、「国連に代表を送るという諸民族がとった誠実な方策が平和をもたらすことを望む」と述べられている [Qalam 1953.9: 14-16]。

第39号から45号に掲載された4編は、筆者が夏休みを利用して旅行に出かけた際の体験が綴られている。バスを利用して南部へ向かい、ボルティモア、ワシントン、アトランタ、ニューオーリンズで折り返してシカゴに至り、最後にナイアガラの滝を訪問している。道中では、ワシントンでのホワイトハウスやニューオーリンズの旧市街、シカゴの水族館、ナイアガラの滝などの観光名所を巡っている (資料3-12: ニューオーリンズの祝祭マルディ・グラ)。

それとともに、社会的な話題も盛り込まれた。南部における人種差別の存在に触れて、リッチモンドからアトランタに向かうバスが白人と黒人の座席が分かれており、黒人は後ろに座っていたことを記述している。それとともに、バス旅行中に知り合った人びとの会話も特徴的である。ボルティモアで知り合った黒人女性は社会主義者と目された。彼女は30年前に中東・近東を訪れた経験あり、最近学位をえて留学の奨学金を得たと聞いて著者は驚いたという。彼女はシンガポールにも居住経験があり、多民族の女性たち鮮やかな衣服に感銘を受けたと話した [Qalam 1953.10: 29-32]。アトランタへのバスでは年配のアメリカ人と会話する機会を得た。彼は博識であったが保守的で、アメリカは自らの身を守ればよく、他国に介入すべきでないと話したという。ニューオーリンズへ向かうバスでは、チェコスロバキア出身でアメリカ国籍を取得したという20代の男と知り合った。彼は、故国では共産主義政府が自由を奪ったため、現在は戦前よりも生活が困難になっていると語ったという [Qalam 1953.12: 23-27]。これらの体験は、アメリカが持つ多様性を物語っているといえよう。

全体として、これらのアメリカの記事は時事的な内容ではない。ただし、これらは当時の東南アジアとは全く異なる物質文化やライフスタイル、社会の様子を描いたものであり、冷戦下におけるアメリカのプロパガンダの一部であるともいえる。これを『カラム』が掲載したということは、彼ら自身も反米的ではなく、近代主義的な傾向を示しているといえるだろう。



資料3-12

おわりに

本論では、1953~56年を中心とした『カラム』誌の写真と関連する記事を通じて、同誌の世界観を明らかにすることを試みた。明らかになった点は以下のとおりである。

第一に、東南アジアのイスラム世界 (マラヤ、インドネシア) の報道の比重が高まっている。ただし、『カラム』の政治的スタンスは両地域における主流派に対しては批判的な立場をとっていた。このため、報道においては主流派の代替となりうる野党勢力に幅広く目配りをしていった。

第二に、中東イスラム世界に関しては、石油に関する報道が増えている。これは、イスラムの中心として同地域が注目されているわけではないことを示している。同時代の中東が国際政治上の焦点となっていたため、石油を生産するイスラム国であるサウジアラビアやイランに注目が集まった。それらの国々が近代化し、欧米やソ連に伍していくことが期待された。

第三に、それ以外では、ソ連、中国といった共産圏、アメリカなどの大国に紙幅が割かれている。ソ連と中国は宗教に対する姿勢が批判の対象となり、自由の欠如が強調されているのに対して、アメリカに関する記事は、ややプロパガンダ色があり、物質的な豊かさ、自由、多様性に彩られていた。イスラム世界に対する報道姿

勢と合わせて、『カラム』が単なるイスラム主義というだけではなく近代主義的性格が反映されているといえよう。

筆者の前稿と比較してみると、創刊当初よりも『カラム』は政治色を強めている。アメリカの記事は異彩を放っているものの、女性の写真を多く掲載した華やかさは失われ、その分政治における権力争いの部分に焦点があてられている。この背景として、第一には冷戦構造が強固なものとなったこの時期の世界的な動向が指摘できる。さらに、東南アジアにおいては、マラヤ、インドネシアが民族主義的な国家建設に収れんし、『カラム』の政治的立ち位置が狭まってきた。これにより、同誌が多様な記事を掲載する余裕が失われてきているとみることもできる。1950年代中葉の『カラム』は、この時期にマレー・ムスリムが経験した大きな時代の動きを生々しく伝えているのである。

参考文献

- Talib Osman. 2002. Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司 2010「コラム「祖国情勢」に関するノート」山本博之編『カラムの時代Ⅰ——マレー・イスラム世界の近代(CIAS Discussion Paper No.13)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.10-17。
- 坪井祐司 2014「カラムが切り取った世界——写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅴ:近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.9-18。

大衆誌から宗教誌へ—— 広告にみるカラム誌の立ち位置の変遷

光成 歩

1. はじめに

本稿は、創刊から1956年にかけての『カラム』掲載広告の推移の分析をとおして、『カラム』が総合誌から宗教誌へとその位置づけを変化させた過程を論じる。この時期の『カラム』の立ち位置の変化は、同時代の政治事件へのエドルスの対応を反映したものであった。政治事件とは、『カラム』およびカラム社発行の週刊誌『ワルタ・マシヤラカット』(Warta Masyarakat)誌がUMNO支持者により燃やされた1953年10月の出来事である。『カラム』の発行部数はこれにより激減し、カラム社は経営難に陥った。エドルスは芸能誌『アネカ・ワルナ』(Aneka Warna)を発行することで財政難を乗り切ったが、これ以降『カラム』に掲載されるのは日用雑貨から化粧品に至る挿絵付きの多彩な商業広告から、教育・教材や宗教書、病院の広告およびカラム社の出版物の広告のみとなった。そして、1956年5月にムスリム同胞団を結成し、『カラム』がその機関誌となると、『アネカ・ワルナ』関係の広告が掲載されなくなるなど、カラム社の出版物の広告のなかでも娯楽性の強い媒体と宗教関係の媒体との区別が一層明確になっていった。

以下では、広告の数および種類の推移を検討し、『カラム』が政治や時事情報から芸能要素を含んだ総合誌から宗教誌へと変化する過程の一側面として論じる。対象とする時期は『カラム』創刊の1950年8月(創刊号は7/8月号)から1956年12月までとする。

2. 初期3年間の『カラム』広告 (1950年～1953年)

創刊から3年間は、人気女優をアイコンとした写真つき広告や、挿絵付きの商業広告が紙面を飾った。断食月明けの増刊号では40本近い広告が掲載され、そのほとんどが日用品、化粧品、高級自転車や時計など、多彩な種類の商業広告であった¹⁾。

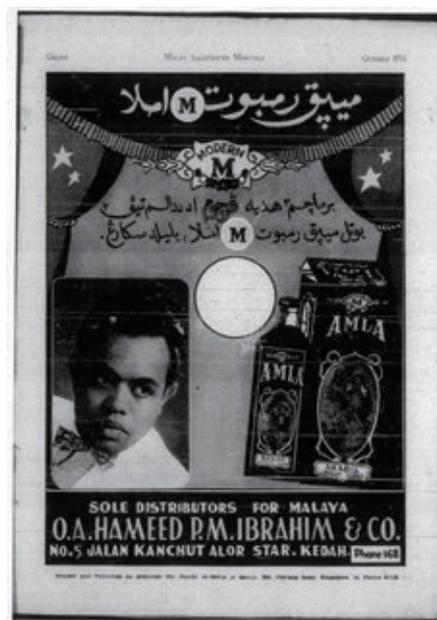


写真1 1953年12月まで掲載されていた
ヘアオイルの広告

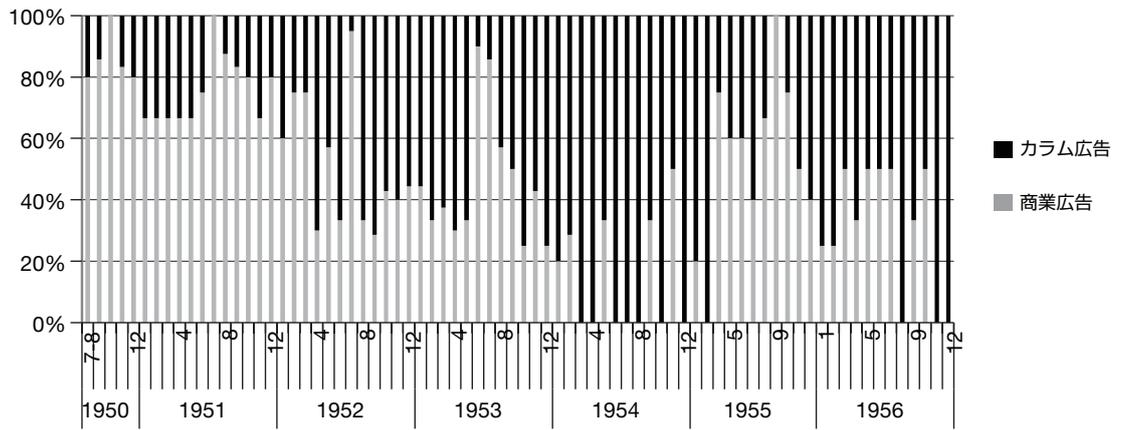
1950年から1951年にかけては商業広告の割合が特に高く、1952年半ば以降にカラム社の出版物の広告ページが増加する(グラフ1)。創刊から約3年の1953年6月号にかけての期間を平均すると、全ての広告ページに対し、商業広告は6割以上を占めた。

商業広告の種類の多様さや広告ページに占める割合の点では、1953年11月号まで同様の状態が続いた。エドルスは1953年4月に子ども向けの『カナ・カナ』(Kanak-kanak)誌を、同年5月に『ワルタ』(Warta)誌(週2回発行)を刊行しており、カラム社の経営状態も良好であったことが伺われる。商業広告が目に見えて減少するのは1953年12月号からである。

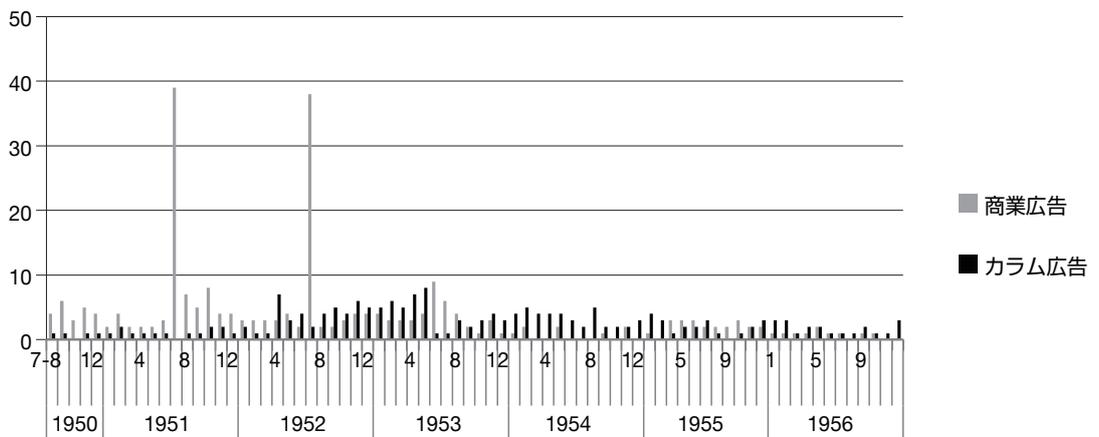
3. UMNOによる糾弾と『アネカ・ワルナ』 (1953年12月～1954年)

1953年10月29日に、ジョホール・バルにおいて『カラム』および『ワルタ・マシヤラカット』がUMNO総裁

1) 1953年6月までの掲載広告については拙稿[光成 2014]を参照されたい。



グラフ1 商業広告とカラム広告の割合変遷



グラフ2 広告数の変遷

のアブドゥル・ラーマンの指示によって燃やされる事件が起こった。『カラム』と『ワルタ・マシラカット』はマレー人の棺に入れられ、UMNO支持者らによって火をつけられた。アブドゥル・ラーマンは『カラム』のUMNO批判を糾弾し、『カラム』はマレー人の敵だ』としてマレー人に『カラム』ボイコットを求めた [The Straits Times 1953.10.30: 1; Talib 2002: 10; 山本 2003: 64]。

この事件を機にカラム社が経営難に陥ったことは、『カラム』の商業広告の激減にも明らかに見て取れる。1953年12月から1954年3月にかけて掲載された商業広告数は0～2本という低水準が続いた。この間も『カラム』の発行は続けられたが、1954年3月号、4月号、6号、7号、8号、10月号、12月号、1954年2月号において商業広告0本という状態であった(グラフ2)。

財政難²⁾の中、エドルスは1954年10月に芸能誌『アネカ・ワルナ』の発行を始める。『アネカ・ワルナ』は女性の扇情的な写真を多用した娯楽雑誌で、『カラム』における広告では次のように謳っている。

2)エドルスは68,000ドルの負債を抱えた[Talib 2002: 12]

もう『アネカ・ワルナ』を楽しみましたか？ もしまだならお見逃しなく。あなたの心をいつでも楽しませてくれます！快活で幸せな生活は、あなたを若々しく楽しめさせてくれるでしょう！

第2号も発売間近。内容はより魅力的で幅広い全84ページで、他の追随を許さない美しい写真入り。特別掲載小説はアンワル³⁾の「美容整形」の他、「聖者司令官の信者」、「欲望の絶頂を迎えたら！」(…)。注意：子どもは読むべからず。第2号は露出が増加します

[Qalam 1954.12: 41]。

女優や歌手の写真、扇情的な小説が受けた『アネカ・ワ

3) アンワル(Anwar)はマレー人作家イスハク・ムハンマド(Ishak Muhammad)の筆名のひとつ。イスハク・ムハンマドは1910年バハン生まれで、マレー高等文官を1933年に辞した後マレー語紙ワルタ・マラヤやウトゥサン・ムラユ記者となった。戦後ブルハヌッディン・アルヘルミらとマラヤ・ムラユ民族党(PKMM)を立ち上げたが、1948年に逮捕された。1953年に解放されると社会主義戦線やマラヤ労働党で活動し、同時に小説を量産した。1965年から1966年にかけて再び拘禁されていたが、その後「Pak Sako」の筆名でウトゥサン・ムラユの人気コラムニストとなる。アンワルが寄稿を止めたことで『アネカ・ワルナ』の売り上げが落ちたほどの人気作家だった[Hooker 2000: 384-385; Roff 1974: 226-229; Talib 2002:12]。

表1 1953年12月～1954年12月の商業広告

事業者名	事業拠点	広告内容	掲載回数
パンジャブ薬店 (Punjab Medical Hall)	シンガポール	痔の治療薬	6
ウォーキー薬店 (Woh Kee Medical Hall)	クアラ・ランプール	英国からの輸入薬販売	1
S. O. バマダージ (S.O.Bamadhaj)	シンガポール&ジョホール・バル	トルコ産ソニコ輸入販売	1
マラヤにおけるインドネシア語発展局 (Dewan Perkembangan Bahasa Indonesia di Malaya)	クアラ・カンサー (ペラ)	インドネシアの書籍輸入販売	1

表2 1955年1月～1956年12月の商業広告

事業者名	事業拠点	広告内容	掲載回数
パンジャブ薬店 (Punjab Medical Hall)	シンガポール	痔の治療	10 (～1955.12)
ヤフヤ・アリフ (Yahya Ariff)	クアラ・カンサー (ペラ)	宗教、アラビア語、英語の通信教育	15 (1955.3～1956.6)
C. ロング・アブバカル (C. Long Abubakar)	クアラ・トレンガヌ (トレンガヌ)	栄養剤・強壮剤	2
サイフィ・ボンベイ屋 (Saifi Bombay Store)	バトゥ・パハ (ジョホール)	ハリ・ラヤの祝辞	1
スター写真店 (Star Photos)	クアラ・ランプール	UMNO本部落成記念写真の販売	1
M. N. アブドゥル・ハミド (M. N. Abdul Hamid)	クアラ・ランプール	ハリ・ラヤのカード販売	1
スター・ファン・コンバイン	シンガポール	芸能ファンクラブ	1
S. K. アブドゥル・ラフマン	ポンティアン (ジョホール)	カラム社の書籍販売店	1

ルナ』は若者を中心に人気を集め、カラム社を経営難から救った⁴⁾。ただし『ワルタ』誌は1955年12月に停刊となったことから、カラム社の出版物一般が人気を回復したとは言えない。1953年12月から1954年にかけて『カラム』に掲載された数少ない広告は、表1のとおりである。

パンジャブ薬店の他はすべて単発の広告で、広告収入は極めて乏しく不安定だったと言える。広告の事業主はその名称からインド系、中華系、インドネシア系であることが分かる。マレー人のボイコットが続くなか、広告という形で『カラム』に資金提供していたのがマレー人ムスリム以外の事業者たちであることは興味深い。

4. ムスリム同胞団結と宗教的要素の強調 (1955年～1956年)

1955年以降は、総数は少ないものの一定の商業広告が毎号掲載されるようになる。

平均すると1953年7月から1956年12月にかけての商業広告が全広告に占める件数は33%で、創刊から最初の3年間までの半分程度の水準であった。

商業広告といってもこの時期のものは教育や医院の広告で、消費意欲を刺激するものではなくなっていた。ほぼ毎号広告を出していたパンジャブ医院とヤフ



写真2 通信教育の広告

ヤ・アリフの通信教育がそれぞれ1955年12月、1956年6月に掲載されなくなると、1956年中盤は単発の広告が毎号0～2本程度載るのみとなり、さらに1956年10月以降商業広告の掲載は0となる。カラム社の出版物の広告は続いたが、1956年後半以降は『アネカ・ワルナ』に関係する広告もなくなった。

商業広告が掲載されなくなった背景には、カラム社が『アネカ・ワルナ』を収入源とするようになったことで、『カラム』がそれ自体の広告収入によらず発行されるようになったという棲み分けの確立があった。また、1956年5月のムスリム同胞団結成も重要な転機だったと考えられる。『カラム』は1956年以降、ムスリム同胞団の機関誌の役割を担うようになり、誌上唯一の挿絵ページはムスリム同胞団への勧誘や同胞団員への呼びかけ欄となった。また、毎号掲載されるムスリム同胞団員名簿によると、ムスリム同胞団結成から半年で938人が、一年後には1848人が加入していた[Qalam 1956.12: 43-46; Qalam 1957.6: 48-50]⁵⁾。読者層が固定化されることで、『カラム』から娯楽や消費文化を煽る要素が消え、イスラミ的な側面を強調するようになったのである。これを端的に示すのが、1956年以降の『カラム』で、芸能人の写真を使った「アネカ・ワルナ・カレンダー」に代わり、「タクウィム・カラム」(Takwim Qalam) が宣伝されるようになったことである⁶⁾。「タクウィム」とはアラビア語の暦を意味する言葉で、「タクウィム・カラム」とはつまり「カラム・カレンダー」である。「タクウィム・カラム」は、宗教指導者像やモスク・風景の写真を使った日めくりカレンダーで、礼拝時刻やイスラミ暦も記されていた[Qalam 1956.10: -3]。芸能・娯楽からイスラミへと『カラム』全体の情報発信の方向性がシフトしていることが、ここからも伺える。

5. おわりに

本稿では、1950年から1956年までの6年間、計77号分の『カラム』における広告紙面の分析を行い、初期の広告欄に表われていた消費や芸能などの娯楽要素が、UMNOによる糾弾事件を機に失われ、ムスリム同胞団の結成時期には明確にイスラミ的要素に力点を移したことを明らかにした。本稿での検討範囲外となった1957年以降の発行分でも、商業広告がほぼ皆無という状態は続いている。1950年代はマラヤにおいて政治

的独立の枠組みが論じられ、マレー人右派政党UMNOの優位が確立していった時期である。この過程で、宗教を軸とする政治的主張は影響力をそがれていった。『カラム』焼却とボイコットの後には、『カラム』が再び大衆誌としての地位を取り戻すことは、こうした文脈からも考えにくい。こうした危機に対応して発行されたのが、女優の写真や扇情的な小説を売りにした芸能誌『アネカ・ワルナ』であった。『アネカ・ワルナ』が若者の人気を集める商業雑誌となる一方、『カラム』は消費や娯楽と関わる商業広告の掲載をやめ、より限定された読者を想定してイスラミ的要素を強調するようになったのである。

大衆誌から宗教誌へという性格の変化は、広告欄のみを検討したなかでの暫定的な議論であり、今後『カラム』の論説文との相互検証を行うことで時期ごとの課題や危機に対する『カラム』の認識や対応を明らかにできるだろう。

参考文献

- Hooker, Virginia Matheson. 2000. *Writing a New Society: Social Change through the Novel in Malay*. Honolulu: Asian Studies Association of Australia, Allen & Unwin and University of Hawai'i Press.
- Roff, William R. 1974. *The Origins of Malay Nationalism*. (2nd edition). Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Talib Samat. 2002. Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 山本博之2003「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』7:59-73。

5) 加入の呼びかけ直後には毎号100名分前後、多いときには200名分近くの名簿が掲載された。2年後には加入ペースは鈍化し、1958年6月の総数は2283人[Qalam 1958.6: 92]。

6) 1954年12月以降1956年1月までは、「アネカ・ワルナ・カレンダー」の1955年版、1956年版の予約注文を受け付ける広告が掲載されていた[Qalam 1954.12: 41; Qalam 1955.10: 24; Qalam 1955.11: 18; Qalam 1955.12:45; Qalam 1956.1:30]が、1957年版のカレンダーとして広告が打たれたのは「タクウィム・カラム」のみだった[Qalam 1956.10: -3; Qalam 1956.11: -3; Qalam 1956.12: 49]。

読者の日常生活におけるハラル

金子奈央

1. はじめに

本稿は、『カラム』誌に掲載された「千一問」(1001 masalah)のうち、1950年から1960年の10年間に焦点をあて、この中で取り上げられたハラル(Halal)に関連する質問に着目し、マレー・ムスリムの人々が持っていた日常的なハラルに関わる疑問や問題意識について整理する。

ハラルとは、イスラム法における「合法的なもの」、「許されるもの」を意味し[多和田 2012:71]、イスラム法で「合法でないもの」や「禁止されるもの」をハラムという。今日、食品のハラル認証が大きな注目をあびるようになり、ハラルはムスリムが食べることができる食品と結び付けて考えられることが多いが、イスラム法によって許可されたものごとや行動などを指す言葉であり、ムスリムの価値判断にとって重要な基準となっているものである。したがって、対象となることからや行動がハラルではない、つまりハラムであると判断された場合、ムスリムがそれらの行為を行うことは禁止されるということになる。

ものごとや行動におけるハラル／ハラムを決められるのは神のみであることはクルアーンにも書かれてあり、『カラム』の「千一問」に寄せられた質問に対する回答においても、それは確認されている。

ハラムがハラルとなり、ハラルがハラムとなる

[Qalam 1958. 3: 38]

【質問】

神がハラムと定めたものをハラルにしたり、神がハラルと定めたものをハラムにしたりする権限が人々にはあるか。

【答え】

ない。そのような権限はない。なぜなら、それを決められるのは神のみであるから。もし我々が適していないと思ったり好きでないとしても、それらをハラムにし

てよいということはない。

『カラム』誌の読者であったマレー・ムスリム社会の人々から「千一問」に寄せられた様々な相談を通して、彼らが当時、どのような物ごとや行為に対するハラル／ハラムに関心を持っていたのか、「お金」、「文化」、「飲食」、「イバーダート¹⁾(断食・礼拝)」の4点から整理する。

2. お金を得る

宝くじの賞金を正しいものにする方法

[Qalam 1951. 5:37]

【質問】

宝くじで当たった賞金をハラルなものにするにはどうしたらよいか。

【答え】

ハラムなものはハラムでしかなく、それをハラルなものにすることが可能な理由や口実はない。ただし、食べ物また薬に限っては、それを摂取せざるを得ない非常事態については例外とする。

銀行預金で得た利子

[Qalam 1951. 12:40]

【質問】

SEA銀行への預金に1リンギットにつき3%の利子を得たら、このお金はハラルかハラムか

【答え】

ハラム。利子は禁止されている。

利子を課すこと

[Qalam 1952. 11:38]

【質問】

お金を貸して利子を取ることはハラルかハラムか。もしハラムだとしたら、それをハラルにする方法はあるか。

1) イバーダート (ibadat) は、信仰を具体的に表明する信者の行為のうち神への奉仕にかかわるものを指す。そこに含まれるのは信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼である。

【答え】

「花を食べる」「花を摘む」という言葉によって我々がより明確に理解している「利子をとる」行為はハラムである。花つまり利子はイスラムでは禁止されている。禁止されていることに対して回避する口実や抜け道を探すことはできないというのは信念を持つ人々にとっては明白なことである。口実または抜け道というのは、自らを偽ること、つまり自らを貶めることであり、神によって定められた決まりを破ることである。

ギャンブルや豚の売買で得たお金

[Qalam 1953. 3:7]

【質問】

「ギャンブルや豚の売却で得られたお金はハラムである、なぜならお金自体は潔白なものであるからだ。ハラムなのは豚を売ったりギャンブルをしたりする行いである」と判断する人々がいる。このような判断は正しいか。

【答え】

そのような理解(ギャンブルや豚を売るという行いそのものはハラムであるが、それから得られたお金自体には罪はないため、お金はハラム)は、イスラムが定める「ハラム」「ハラル」という決まりを破壊する危険性が大きい。反逆や災いは、ギャンブルや豚をハラムとするイスラムを信仰する国々では起こらないであろう。なぜなら、木を先に伐採すれば果実は確実に実らないからだ。我々イスラム共同体が、ギャンブルや豚、またはそれらによってつくられたものや、それらによって得た利益を持たない国や社会をつくることのできることを願う。(中略) (1)利子、ギャンブル、宝くじといった、自らの労力を使うことなく努力もせずを得たもの、(2)ギャンブル、詐欺、嘘といった行為によって得たもの、(3)豚、アルコール、アヘンといった健康を害するものから得られたもの、これらの3つに含まれるものは、イスラムの教えによってハラムとされ、認められていないものである。

生計を立てるための職業の選択

[Qalam 1951. 12:41]

【質問】

生活費を求めるムスリムがヨーロッパ人の靴を磨く仕事をすることはどう判断されるか。

【答え】

(その仕事をする)必要がある。正しい方法で生計を立てること(正しい方法とは、精力的に、努力して、一生懸命稼ぐこと)は必要であるし、むしろ、それは尊いことである。卑しいとされているのは、盗む、嘘をつく、暴力をふるうことであり、そして他人の権利を奪うことである。

3. 文化

映画館を立てることによる影響は

[Qalam 1951.9:39]

【質問】

映画館を建てることは罪になるか。その映画館で上映されている映画は一般的なものであるが、そこから受ける影響はハラルかハラムか。

【答え】

映画館を建てることは、一般的な家屋を建てるのと同様に禁止されることではない。(上映される映画から受ける影響が)ハラルかハラムかについては、上映される映画のジャンルによる。

ジョゲット・モダン²⁾①

[Qalam 1953. 4:10]

【質問】

男性と入り混じってジョゲット・モダンを踊る女性たちは、イスラムの観点からいかがなものか。また、なぜ行政の側から注意がないのか。

【答え】

間違いなくハラムである。ジョゲット・モダン、我々が生活する社会において、既に社会の混乱やあらゆる災いの原因となっている。まだ学齢期である我々の子どもまでこの災いから逃れられなくなっている。行政が注意を払っていないことについては、あなたが意味するところの行政が宗教局であるとしたら、彼らには禁止したりやめさせたりする権限がなく、せいぜいできるのは忠告ぐらいである。もし、あなたが政府を想定しているのだとしたら、現在の政府はイスラム法とは異なる独自の法を持っている。

ジョゲット・モダン②

[Qalam 1952. 1 : 37]

【質問】

妻がジョゲット・モダンを踊り、夫がそのチケットの売り子をしていた場合、これはどのような判断になるのか

【答え】

ジョゲットは、イスラムの教えに反するものとみなされ、禁止されている。従って、妻はイスラムの教えに背くような仕事をしていることになり、夫は(ハラルともハラムとも言えない)「疑わしい」チケットを売っていることになる。

2) ボルトガル起源の軽快なリズムのマレーダンス、男女で踊る

4. 食べる／飲む

イスラムの知識が不足している人が屠畜した家畜を食べること [Qalam 1952. 1:37]

【質問】

イスラムの教えの分別がないマレー人が村にたくさんいる。彼らが屠畜したものを食べてもよいか（彼らが屠畜した動物を食べることはハラルか）。

【答え】

屠畜する資格は、神の名の下にあり、鋭利なナイフで（家畜の）頸動脈を切断する。もし、このように実施された屠畜であればハラルである。

猟銃を使って狩猟した鳥を食べること

[Qalam 1952. 2:31]

【質問】

現在、猟銃で鳥を撃ち落とす人が多すぎる。もし、それらの鳥が（撃たれた後）生きていた間に屠畜されたら、それはどのような判断になるか。

【答え】

撃ち落とされた鳥が生きていた間に屠畜されたのであればハラルであり、食用として食べることができる。銃弾を鋭利なもののみならず、撃つ際に「神の御名において (Bismillah)」と発すればハラルであり、（撃って屠畜した）鳥を食べることができるという意見を持つウマーもいる。

アルコールはなぜ飲んではいけないのか

[Qalam 1952. 3:39]

【質問】

なぜ、アルコールはハラルとされる原材料から製造されているにもかかわらずハラルなのか。

【答え】

アルコールは人を酔わせるのでハラムとされている。人は酔うと人としての知性や思考力を失い、人としての品性を持ったものから、動物と同様のふるまいをするものへと変貌する。知性や思考力を失ったとき、見境がなくなり、悪い行いをしてしまうことがある。アルコールは悪の要因となってしまうということが（ハラムとされる）理由である。アルコールがハラムとされる食品からつくられているというのは本当だが、それ（ハラムな原材料）によってつくられたものは変化している。したがって、（変化後のアルコールについては）ハラムとなる。

薬に含まれるアルコール成分

[Qalam 1952. 11:39]

【質問】

ある病気を治療するための薬にアルコールを含んでいる。木の根や葉を原料として作られる薬を、腐敗させず、何年でも保存できるように（アルコールが）混ぜている。これにはどのような判断がなされるか。

【答え】

アルコールのように人を酔わせるものを薬の中に含めるときは、正しい知識に基づいた方法で混ぜる必要がある。憶測、推測は用いてはならない。（アルコールのように）ハラムでありながらも服用が認められるのは、病気が重篤な状態に達したときか、定められたルールに基づき、目的をもって服用される場合である。従って、ウマーの理解に従ってアルコールを服用する必要があり、この服用がイスラムに基づき禁止されているものでなければ、アルコールの服用が認められる。薬剤師が調剤する場合は、誤りに対して責任を負わなければならない。

ココア・コーラとペプシ・コーラの原料

[Qalam 1952. 12:19]

【質問】

ココア・コーラとペプシ・コーラにはアルコールや人を酔わせるものが含まれているリスクがあると言われたが、これは本当か。

【答え】

本件はアズハルのファトワ（宗教的見解または宗教令）協議会まで届けられており、その結果、アズハルは以下のようなファトワを出した。

ペプシ・コーラやココア・コーラに関する質問は、アズハルのファトワ協議会にたくさん寄せられている。質問者は、「この二つの飲料をハラムとするファトワが出された。なぜなら、ペプシ・コーラには豚由来の成分が入っており、一方ココア・コーラには人を酔わせるものが含まれているからだ、という人がいる」と言う。我々（アズハルのファトワ機関）は、保健大臣局による調査結果が出る前に、ファトワは出さないという考えを持っていた。ペプシ・コーラおよびココア・コーラの製造工場に対する調査により、この二つの飲料にはどちらも人を酔わせるようなものまたはアルコール成分は含まれておらず、また「ペプシン」という豚由来の成分も含まれていないという結果が出た。また、その他の人々の健康を害するものも含まれていない。

これにより、この二つの飲料をハラムにする理由はない。なぜなら、（飲料が）ハラムとなる理由となるのは、人を酔わせ、理性を失わせ、不浄で、健康を損ねるといったものだからである。このようなものは、これらの二

つの飲料からは見つからなかったし、豚由来の成分など不浄なものも見つからなかったと結論付けられた。この調査に従い、この二つの飲料はハラムではないという判断を下した。

我々(カラム)は、この説明が、質問者を満足させ、読者を安心させることを信じている。

5. イバーダート(礼拝・断食)

勤務と礼拝の両立

[Qalam 1952. 12:19]

【質問】

軍に勤務している。始業は7時で、終業は15時である。11:30~12:00が昼食の時間で、zuhur(1日5回あるイスラムの礼拝の時間のうち昼過ぎの礼拝)にあてられる時間は12:20くらいまでである。水、土、日の3日間を除いた全ての日において、私はzuhurの礼拝を完遂することができない。なんとか完遂しようと方法を模索してみたが、失敗してしまった。この問題に対する助言がほしい。

【答え】

我々の考えとしては、(15時の終業後にzuhurの礼拝をおこなうことをすすめる)15時の終業後の時間も、通常まだzuhurの時間の範囲であるため、終業後にzuhurの礼拝をおこなうのでも間に合う。もしあなたが同僚とともに帰宅するために(zuhurの礼拝にあてる)時間が足りないのであれば、彼らに10分ほど待ってもらえるようお願いしてはどうか。軍の福祉部局から宗教にかかわる要望を尊重してもらえるように取り合ってもらってはどうか。

断食月の日中に異教徒に食べ物を売ること

[Qalam 1955. 2:12]

【質問】

断食月の日中にムスリムがムスリムでない他の民族の人たちにご飯や他の食べ物を売ってもよいか。

【答え】

食べ物をムスリムでない人々に(断食月の日中に)売ることは禁止されていない。断食月には、断食が義務付けられている人も、義務付けられていない人(子ども、月経中または出産後の出血のある女性、病人、航海中の人、妊娠中または授乳中の女性、断食に耐えうるだけの体力のない高齢者、重労働な職に就いている人など。ただし、後で断食月に遂行できなかった断食を遂行する必要がある人たちもこの中に入る)もいる。ムスリム以外の人に断食月の日中に食べ物を売ることは禁止さ

れていないが、ムスリムに売ってはいけない。もし病気(または、上で挙げられた断食を義務付けられていないムスリム)ではないムスリムに売った食べ物を(彼らが日中に)食べたら、その食べ物はアッシア(神の教えに反する罪を犯したもの)が食べた疑わしいものとなる。

病気を患っている場合の断食

[Qalam 1952. 9:14]

【質問】

結核のような深刻な病気を患っている人が、毎年断食月に断食ができず、(断食月に行くことができなかったものを別の月に遂行するなどして)断食の義務を果たすこともできず、万が一断食をしたとしたら彼の病状が悪化するだろう場合、これはどう判断されるか。

【答え】

病気であることが常態化していて、もし断食を行えば病状を悪化させるだろう人、断食すると決まって病気を患う体質の人、金、鉄、錫、石炭などの鉱山のような過酷な環境で重労働をすることで生計を立てている人、非常に高齢な人または妊娠していたり子どもに授乳をしている女性、つまり断食をすることは可能であるが(それによって問題が生じる可能性が高く)断食するのが難しい人は、断食は義務ではない。(断食ができないムスリムは)その代償を払う義務を負っており、その代償とは貧しい人々に食べ物を与えることであるとするウラマーも一部いる。

6. おわりに

本稿が取り扱った1950年から1960年の約10年間は、マレー半島では、脱植民地化から近代国家の成立と大きな変化を遂げた時代である。それに伴い、その構成員であったマレー・ムスリムの日常空間にも様々な変化が起こっていただろう。

例えば、近代国家となった(近く脱植民地化を目指していた)マラヤでは、世俗教育的特徴に基づいた公教育制度の整備や普及に伴い、伝統的イスラム教育の軽視や、それに伴うマレーコミュニティの道徳観念の揺らぎや乱れに対する危機感が持たれていた。この当時のマレー・ムスリムの道徳心や信仰心の低下や風紀の乱れなどは『カラム』誌においても問題視され、成熟した道徳観念を育てるのは家庭やコミュニティによるイスラム教育(イスラムの教えに基づいた家庭教育)の役割であるとの主張もなされた。

このような社会やイスラムをとりまく環境の変化に伴い、物ごとや行いにおけるハラル(許されるもの)

とハラム(禁止されるもの)の価値判断基準に対する多様な疑問や問題意識をマレー・ムスリム社会の人々は抱いていた。「今、自分たちが置かれている環境において、それはハラールであるのか、ハラムであるのか」に関する判断基準が不明瞭であると感じるものについて、『カラム』誌の「千一問」には多くの質問が投稿された。これらの質問は、特に「お金」「文化」「飲食」「イバーダート(ムスリムが守るべき義務)」の4点に集中した。「お金」に関しては、お金を獲得する手段や方法がハラール(許される)範囲のものであるかに関する質問とともに、「お金」そのものに対するハラール性について問う(獲得するプロセスのハラム性は、それで得たお金そのもののハラム性へと繋がるのか)投稿がなされた。「文化」については、「イスラム的ではない」ものが混淆した文化に関して、それをを行うことや行われる場についてどこまでをハラールをみなしうるのかという線引きの問題が投げかけられた。「飲食」や「イバーダート」については、日常的に直面するやむを得ないもの(病気、勤労など)とどう向き合いながらムスリムとしてハラールを実践していくかに質問の多くが関連しているように見受けられる。

近代国家という新しい統治枠組みの中に組み込まれたことにより、社会には様々な変化が生じた。また、

イスラム以外の習慣や文化、ムスリム以外の人々と「交わる」ことが日常的であるマレー・ムスリムの人々が、自らを取り巻く社会の中で、一人のムスリムとしてハラールを実践し続けるための知識や知恵を持つことが求められた。そのような時代の中で、「千一問」における質問と問いを通して、マレー・ムスリムの人々が、「ハラールを実践するとは」ということを改めて理解しようとしていたことが、彼らの投稿から垣間見えるのではないだろうか。

参考文献

- 桃木至朗ほか編(2008)『新版 東南アジアを知る事典』、平凡社。
- 多和田祐司(2012)「イスラームと消費社会：現代マレーシアにおけるハラール認証」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第63巻、pp.69-85。
- 日本イスラム協会ほか編(2002)『新イスラム事典』、平凡社。
- 山本博之(2002)「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』第20号、pp. 259-343。

執筆者一覧

坪井 祐司(つばい ゆうじ)

東洋文庫研究員。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。専門はマレーシア近代史。研究テーマはイギリス領マラヤの植民地行政とそれに対するマレー人を中心とした現地の人々の関わり。主な論文は、「英領期マラヤにおける『マレー人』枠組みの形成と移民の位置づけ：スランゴール州のプンフルを事例に」(『東南アジア 歴史と文化』、2004年)。

亀田 堯宙(かめだ あきひろ)

京都大学地域研究統合情報センター助教。専門は情報学。研究テーマは、データの共有とデータ間の意味的な関連付け。主な論文に“Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers using Syntactic Patterns,” *The Fifth International Conference on Information, Process, and Knowledge Management* (2013), Integrate Japanese Red List into LOD of Species, *PNC Annual Conference and Joint Meetings* (2013), 「Linked Open Data による絶滅危惧種情報共有の試み」人工知能学会全国大会(第28回)論文集, 1G4-OS-19a-3(2014)がある。

山本 博之(やまもと ひろゆき)

京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はマレーシア地域研究／現代史。研究テーマは、イスラム教圏東南アジアの民族と政治、アジアの災害対応、地域研究方法論。著書に『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』(東京大学出版会、2006年)、編著書に *Bangsa and Umma: Development of People-grouping Concepts in Islamized Southeast Asia* (Kyoto University Press, 2011)がある。

光成 歩(みつなり あゆみ)

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程在籍。専門はマレーシア地域研究／イスラーム司法制度。研究テーマはマレーシアにおけるイスラーム司法制度の展開と「改宗問題」。主な論文は「現代マレーシアにおける『改宗・棄教』をめぐる語りの構造：非ムスリムによる『リナ・ジョイ係争』への支持言説を手がかりに」(『アジア地域文化研究』、2009年)。

金子 奈央(かねこ なお)

東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程在籍。専門はマレーシア地域研究／比較教育学。研究テーマは、マレーシア・サバ州における原住諸民族の教育活動およびマレーシアの国民統合と教育。主な論文は「教育にみる国民統合政策の展開：『公民および市民性の教育』科目を手掛かりに」(『季刊マレーシアレポート』、2009年)。

CIAS Discussion Paper No. 54

坪井祐司・山本博之 編著

『カラム』の時代Ⅵ
近代マレー・ムスリムの日常生活 2

発行 2015年3月

発行者 京都大学地域研究統合情報センター
京都市左京区吉田下阿達町46 〒606-8501
電話: 075-753-9603 FAX : 075-753-9602
E-mail: ciasjimu@cias.kyoto-u.ac.jp
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp>